NEWS

都市文化研究センター（UCRC）の全体的な活動とスタッフ

仁木　宏（文学研究科教授，UCRC 副所長）

2007 年 4 月，都市文化研究センター（Urban-Culture Research Center，以下，センターと略）が新生して以降，センターでは，先端レベルの研究成果を生み出し，大阪市立大学大学院文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にするための活動を展開してきた。

具体的には，文学研究科における共同研究を主導するとともに，文学研究科に関係する大学院生，若手研究者に対して高度な教育・研究支援を行うこと，文学研究科教員に利便性の高い研究支援方策を提供することなどを目的としている。

そのため第一に，大阪市立大学の学内競争的資金である「重点研究」や「都市問題研究」に応募し，研究資金を獲得して多角的，機動的な研究活動を行ってきた。また，今年度新たに，別の「都市問題研究」に応募し，採用された（「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」，2010～2012 年度，研究代表者：塚田孝教授）。

さらに，近い将来，文学研究科あるいはセンターとして G-COE（ないしその後継の競争的資金）へ申請する基礎条件を充実させるため，「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」，「平成 24 年度国際学術シンポジウム」（大阪市立大学）などへの応募にセンターとして取り組んだ（これらについては残念ながら不採択であった）。

大学院学生・OD など若手研究者に対する支援事業としては，国際発信力育成インターナショナルスクール（IS）を開催し，国際学会における英語での学術発表，国際学会誌への英文投稿などの技術力養成につくした。また，昨年度末より「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採用された（2012 年度まで）。

また，UCRC ドクター研究員制度を継続し（「表　2010 年度ドクター研究員一覧」参照），学位取得の促進，研究環境の整備につとめた。さらに意欲的な研究員には，ドクター研究員プロジェクトによって研究資金を提供したり，科学研究費を申請するための技術的なアドバイスを行っている。企業・財団などによる研究・留学資金提供についても恒常的に情報提供してきた。なお，IS やドクター研究員制度は文学研究科以外にも門戸を開いており，学内他部局や学外よりの参加者も少なくない。

教員への研究支援策としては，科学研究費申請を後援する事業を今年度も実施した。最新の研究成果を市民に還元する事業として，上方文化講座を継続して開催した。学術情報総合センターのサブセンターの跡地は「情報編集室」となり，UCRC，IS，若手派遣，「人文研究」（文学研究科紀要）などの合同オフィスとなった。また同室の一画は，展示スペースとなり，複数のイベントが開催された。

以上のようなセンターの研究成果を発信するため，文学研究科叢書の刊行に引きつづき努力した。若手研究者の発表機会を提供するために雑誌『都市文化研究』を編集・発行した。さらに，電子（英文）ジャーナルを創刊した。

■スタッフ

センターの運営にあたる教員スタッフ（コアメンバー）は以下の通り。昨年度から 1 名減った。（順不同）

所長：中川眞教授（アジア都市文化学）

副所長（事務局長）：仁木宏教授（日本史学）

常任研究員：井上徹教授（東洋史学），塚田孝教授（日本史学），水内俊雄教授（地理学），谷富夫教授（社会学），石田佐恵子教授（社会学），多和田裕司教授（アジア都市文化学），山崎孝史教授（地理学），村田正博教授（国文学），大場茂明教授（地理学），平田茂樹教授（東洋史学），久堀裕朗准教授（国文学）

この他，ドクター研究員もスタッフとして研究活動に参加しており，研究履歴となる。

●センター会議の開催

第 19 回　2009 年 10 月 9 日
第 20 回　2010 年 1 月 8 日
第 21 回　2010 年 1 月 29 日
第 22 回　2010 年 3 月 23 日
第 23 回　2010 年 4 月 9 日
第 24 回　2010 年 5 月 14 日
第 25 回　2010 年 7 月 9 日
第 26 回　2010 年 9 月 10 日

●UCRC のホームページ

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/

国際発信力育成インターナショナルスクール

多和田裕司（文学研究科教授，常任研究員）

2009 年度末をもって文部科学省大学院教育改革支援

プログラムが終了したことにともない，2010 年度のインターナショナルスクール（IS）各事業は，文学研究科独自の事業として実施された。予算面に関しては大学の教育支援経費による支援を得たことで，これまでとほぼ同様の事業をおこなうことができた。

IS 集中科目については，海外から 2 名，国内から 1 名の外国人講師を招聘し，「比較文化交流論Ⅱ」（文学研究科共通科目，文学部共通科目）として開講した。それぞれ午前中は講師による講義と質疑応答が英語でおこなわれた。本年度も神戸女学院の協力による英語と日本語双方の同時通訳を利用した。また，午後は大学院生が英語で研究発表をおこない，質疑応答のあと，外国人講師からアドバイスを受けた。

なお，本年度は次の 3 点について前年度の方式に変更をくわえた。(1) 外国人講師による講義のキイタームや当該分野における位置づけなどについて，専門分野の近い文学研究科教員が日本語で事前解説をおこなった。(2) 3 日目の講義については，担当講師が日本人学生にたいする英語での授業経験が豊富なことから，初めての試みとして同時通訳なしでの授業を実施した。(3) 3 日目の午後に，「若手研究者等海外派遣プログラム」によって海外に派遣された学生による報告セッションを設けた。

IS 集中科目の詳細は以下の通りである。

9 月 14 日（火）

【午前の部】総合司会・日本語解説：中川眞教授

あいさつ　村田正博教授（文学研究科長）

講義　プラポン・カムジン（Prapon Kumjim）講師（Chulalongkorn University, Thailand）The Transformation of Contemporary Art Management in Bangkok between 1997-2010

【午後の部】座長：土屋貴志准教授，岩田彩志准教授，

小牧龍太氏（University of Illinois）

吉川泰生（哲学）Locke and Berkeley on Molyneux's Question（モリニュー問題をめぐるロックとバークリ）

濱道孝尚（日本史学）An Analysis of the Descriptions of the Chinese Classics in the Shosoin Documents（正倉院文書における漢籍史料の基礎的考察）

冨岡三智（都市文化研究センター研究員）Establishment of Conceptual Court Dance through its Teaching Method（教育メソッドを通じた概念的な宮廷舞踊の成立）

9 月 15 日（水）

【午前の部】総合司会・日本語解説：進藤雄三教授

講義　ティム・リャオ（Tim Liao）教授（University of Illinois at Urbana-Champaign, USA）Of Rice and Men: Commodity, Hybridity, and Collective Memory in the American Marketplace

【午後の部】座長：井上浩一教授，山口哲生氏（大阪市立大学文学部・非常勤講師）

米岡大輔（都市文化研究センター研究員）The Bosnian Muslim-Intellectuals and their Concept of National Identity（1878-1918）（ボスニア系ムスリム知識人の「民族」論（1878-1918））

大澤裕美佳（心理学）Effects of Information from a Third Party on a Negative Impression of Others（他者に対する否定的印象におよぼす第三者からの情報の効果）

八木広大（心理学）Impulsiveness and Selfishness from the Standpoint of Discounting（価値割引の観点から見た衝動性と利己性の関係）

9 月 16 日（木）

【午前の部】総合司会：高島葉子准教授，日本語解説：海老根剛准教授

講義　ジャクリーヌ・ベルント（Jaqueline Berndt）教授（京都精華大学，日本）Postcritical Anime: Observations on its 'Identities' within Contemporary Japan（英語のみ）

【「若手研究者等海外派遣プログラム」派遣者による報告】座長：井狩幸男教授，添田晴雄准教授

野田はるか（表現文化学），渡辺舞子（英語英米文学）

【午後の部】座長：古賀哲男准教授

岡田高志（国語国文学）An Analysis of the Descriptions of Myths in Ancient Japanese Literature（上代文献における神話記述の分析）

坂井晶子（表現文化学）On the Usage of Punctuation Marks in the Twenties of the Meiji Era（明治 20 年代の文学における記号の使い方）

IS 集中科目に先立って，その発表者を対象とする**トレーニングプログラム**が本学英語関係教員によって実施された。トレーニングは 4 月から 9 月におよび，英文原稿作成，英文添削，プレゼンテーション訓練，リハーサル等，英語で研究発表をおこなうためのスキルアップがはかられた。また日常的な学習の場での国際発信力の向上を目指して，**アカデミック・コミュニケーション演習**（Ⅰ・Ⅱ）を前期博士課程の授業科目として開講した。

これ以外に，外国語雑誌への投稿や国際会議での発表を予定している大学院生等を対象に，**論文の翻訳・校閲支援**（ひとりあたり上限 75,000 円）をおこなった。さらに都市研究プラザ G-COE との共催で，英語による論文執筆の習熟を目的とする**ライティングセミナー**を実施した。セミナーは基礎編（5 月～6 月（講師：山崎孝史教授））と実践編（9 月～10 月（講師：崎村耕二・京都

工芸繊維大学教授)）の2回にわけておこなわれた。

2010年度IS集中科目終了後，ただちに2011年度の集中科目実施のための新IS運営委員会（委員長：海老根剛准教授）が発足するとともに，ISの日常化に向けての検討が同委員会において開始された。

国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム

添田晴雄（文学研究科准教授）

文学研究科では，大学院GP「国際発信力育成インターナショナルスクール」（2007年度〜2009年度）を通して，大学院生の国際発信力を育成する実践を積み重ねてきており，その一環として大学院生の国際学会等発表・参加支援プログラム（「研究成果を持って外国に飛び出そう！」）で，補助期間の3年間で延べ31名の大学院生を海外に派遣した。これらの成果を踏まえ，2009年に独立行政法人日本学術振興会の研究者海外派遣基金に基づく「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に「国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム」として応募したところ幸いに採択された。

本取組の**目的**は，派遣支援を受けた若手研究者が派遣を契機として，その後の研究者キャリアにおいて，研究成果の海外発信，外国大学の研究者との共同研究，海外研究機関への長期滞在，外国人研究者の招聘などの，積極的な国際的な研究交流をするようになること，および，自らが若手研究者を指導する立場に置かれた場合に，国際的研究交流マインドを指導できるようになることである。

助成期間は，2010年3月12日〜2013年3月11日で，**助成対象**経費は43,000,000円（うち，39,638,000円が渡航費・滞在費，3,362,000円が一般管理費）であり，助成期間の3年間に延べ89名以上の若手研究者を海外に派遣することが条件となっている。「若手研究者」の定義は，出国する年度の4月1日現在に43歳未満である本研究科に所属する大学院生，UCRCドクター研究員，講師，助教である。なお，派遣人数のうち，19名以上は，教員か博士号を取得したUCRCドクター研究員が2か月以上滞在する派遣でなければならないことになっている。

運営は，申請メンバーである中川眞教授（主任担当教員），村田正博教授，多和田裕司教授，仁木宏教授，井狩幸男教授，添田晴雄准教授（事務局長），とオブザーバの大場茂明教授（副研究科長），井上徹教授（評議員）からなる国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム（通称ROV）運営委員会が担当している。

派遣には次の3つのカテゴリーがある。

（カテゴリーⅠ）ポスドク以上，2か月以上（原則として3か月未満）

応募資格：43歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，博士号取得済みのUCRCドクター研究員。

派遣先で，研究・実験・フィールドワークをおこなうとともに，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。派遣終了後，成果還元のための活動を行う。

（カテゴリーⅡ）大学院生以上，2か月未満

応募資格：43歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，UCRCドクター研究員（博士号既取得者に限らない），本研究科後期・前期博士課程大学院生。

派遣先で，研究・実験・フィールドワークをおこなうとともに，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。派遣終了後，成果還元のための活動を行う。

（カテゴリーⅢ）大学院生以上，1か月未満

応募資格：43歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，UCRCドクター研究員（博士号既取得者に限らない），本研究科後期・前期博士課程大学院生。

派遣先で，学会等での発表をおこなうなど，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。あるいは，文学研究科が認める研究者等資質向上研修に参加する。なお，カテゴリーⅢには，カナダ・ビクトリア大学英語センター・プレゼン研修への派遣，アメリカ・イリノイ大学国際コロキアムへの派遣，タイやインドネシアでの国際アカデミックフォーラム等，本研究科が企画運営を行う国際研究会等への派遣が含まれる。

派遣は原則として公募による選抜によって決定することにしている。月1回の応募締切を設けて公募し，ROV運営委員会内の選抜小委員会で原案を作成し，ROV運営委員会および教授会の承認を経て派遣が実施される。派遣にあたっては，往復の航空運賃と宿泊費の実費が支給される（教員については，航空運賃のほか規定にもとづく日当と宿泊費が支給される）。

2010年11月現在に決定している2009年〜2010年度分の派遣は，カテゴリーⅠとして4名（佐藤量：中国71泊，松原仁美：フランス71泊，中谷惣：イタリア63泊，木村容子：イタリア62泊），カテゴリーⅡとして7名（今野泰三：イスラエル31泊，信藤博之：オースト

ラリア 58 泊，野田はるか：ドイツ・フランス 14 泊，永田拓治：中国・台湾・韓国 37 泊，田原憲和：ルクセンブルク 12 泊，有田豊：イタリア 9 泊，田中達也：オーストリア 11 泊），カテゴリーⅢとして 20 名（ヒェラルド・コルナトウスキー：インドネシア 5 泊，高崎章裕：アメリカ 6 泊，岡戸香里：ドイツ 8 泊，王標：中国 5 泊，辻高広：中国 0 泊，矢田尚也：アメリカ 4 泊，田端拓哉：アメリカ 4 泊，このほか，カナダ・ビクトリア大学英語センター・プレゼン研修は，8 月 29 日〜9 月 12 日，井狩幸男教授の引率のもと，岡田高志，寒川万里菜，清水美里，吉山博貴，李英熙，渡辺舞子，全ウンフィ，田中宏明，金邵引，佐伯綾那を派遣し，アメリカ・イリノイ大学における国際コロキアムには，山崎孝史教授，佐伯大輔准教授と共に，濱道孝尚，石川優，安江枝里子を 3 月に派遣する予定である）となっている（敬称略，泊数はプログラムにより支給される泊数のみ）。

なお，本取組の最新情報は，http://educa.lit.osaka-cu.ac.jp/~rov/index.html からアクセスできる。

重点研究の活動

井上　徹（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学大学院文学研究科重点研究プログラム「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」（研究支援期間 2008 年度〜2012 年度）は，『都市文化研究』第 12 号掲載分（2009 年 11 月まで）以後，以下のような活動を進めてきた。

(1) 研究会・シンポジウムの開催

・萬年社コレクション調査研究プロジェクト報告会

主催：大阪市立近代美術館建設準備室，大阪市立大学，大阪メディア文化史研究会

2009 年 11 月 28 日，大阪市立大学文化交流センターホール

司会：石田佐恵子（大阪市立大学），土屋礼子（大阪市立大学）「萬年社コレクション調査研究プロジェクトの経緯について」，菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室）「萬年社コレクションのビデオ・テープ類の目録にみる広告主」，土屋礼子＆海堀友貴（大阪市立大学）「ラジオＣＭのデジタル化」，竹内幸絵（神戸大学）＆牧浦裕介（大阪市立大学）「萬年社コレクションの紙・印刷資料の概要と整理状況」，土屋礼子「萬年社コレクション調査研究プロジェクトの今後の課題」

・比較都市文化史研究会

2009 年 12 月 5 日，大阪市立大学経済研究所棟 521 教室

伊藤一馬（大阪大学）「北宋後期の西北辺地域における統治体制の構造 —— 黒水城出土漢文文書の検討を通じて ——」，水越知（京都大学）「宋—清間における親子間の訴訟について」

・大阪市立大学・上海師範大学共同セミナー

2009 年 12 月 6 日，大阪市立大学高原記念館学友ホール

共催：UCRC（重点研究），上海師範大学中国近代社会研究中心

挨拶：村田正博（大阪市立大学），趣旨説明：井上徹（大阪市立大学）

第 1 部「日中文芸の比較史」

久堀裕朗（大阪市立大学）「近世後期における淡路人形座と大坂浄瑠璃界」，張新民（大阪市立大学）「電影与近代上海市民娯楽」，松浦恆雄（大阪市立大学）「中国現代都市演劇における特刊の役割」

第 2 部「中国の近代」

挨拶：唐力行（上海師範大学），唐力行「評弾：紐約江南人的文化記憶」，蘇智良（上海師範大学）「鴉片烟与近代中国人的生活」，周育民（上海師範大学）「晩清釐卡与蘇南市鎮」，銭杭（上海師範大学）「蕭山調査—位于大城市之間的中小都市如何選択発展道路」，徐茂明（上海師範大学）「血縁，業縁与地縁的交識—近代蘇州醤業中利益関係与衝突」，呉強華（上海師範大学）「近代江南士人結社与社会控制」，洪煜（上海師範大学）「蘇州評弾与近代上海市民生活」

・国際シンポジウム「都市の歴史的形成と文化創造力」

2010 年 1 月 9 日・10 日，大阪市立大学学術情報総合センター・大阪市立大学高原記念館

主催：UCRC（重点研究），共催：大阪市立大学都市研究プラザ

趣旨説明：井上徹（大阪市立大学），基調講演：サスキア・サッセン（コロンビア大学）“The Global City at a Time of Crisis: From Finance to the Social Questions.”，吉澤誠一郎（東京大学）「中国近代都市の社会変遷と文化再造」，吉田伸之（東京大学）「伝統都市の社会＝文化構造」

第 1 セッション　「都市の歴史的段階Ⅰ　中世都市文化の形成と変容」

高橋修（茨城大学）「中世東国における都市形成と在地領主」，仁木宏（大阪市立大学）「中世都市社会の変容 —— 町（ちょう）形成以前の京都」，呉松弟（復旦大学）「東南沿岸山区的市場与市鎮 —— 以浙江泰順為例」

第 2 セッション　「都市の歴史的段階Ⅱ　近世都市文化の成熟」

塚田孝（大阪市立大学）「身分社会としての都市大坂

―― 垣外仲間にそくして」，谷直樹（大阪市立大学）「近世大坂における都市生活文化」，早瀬晋三（大阪市立大学）「『商業の時代』後期の交易品 ―― イギリス東インド会社『マカッサル文書』」

第 3 セッション「都市の歴史的段階Ⅲ　グローバリゼーションと現代都市」

妻木進吾（大阪市立大学）「現代大阪の都市下層」，青木秀男（社会理論・動態研究所）「グローバリゼーションとマニラの都市下層」，高畑幸（広島国際学院大学）「通過点としてのマニラ―韓国人学生，フィリピン人船員，そして若年女性」，祖田亮次（大阪市立大学）「ボルネオ先住民の都市－農村間移動」，谷富夫（大阪市立大学）「沖縄の過剰都市化と移動世代」，コメント：野村親義（大阪市立大学）

・比較都市文化史研究会

2010 年 2 月 6 日，大阪市立大学文学部棟会議室

榎並岳史（新潟大学）「南宋の「帰正人」について―その呼称と実態をめぐって―」，矢澤知行（愛媛大学）「元末諸勢力による「外交」の展開」，曹家斉（中山大学）「官路，私路與驛路，縣路 ―― 宋代州（府）縣城周圍道路格局新探」

・平成 21 年度重点研究・研究成果報告会

主催：UCRC（重点研究）

2010 年 3 月 19 日，大阪市立大学文学部棟会議室

重点研究担当者全員による研究成果報告

・近世大坂研究会

主催：近世大坂研究会，共催：文学研究科重点研究・GCOE 都市論ユニット（歴史系）

2010 年 6 月 2 日，大阪市立大学文学部棟会儀室

ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学）「近世関東の被差別民に関する 2，3 の問題」，三田智子（学術振興会特別研究員・G-COE 博士研究員）「近世畿内のかわた村」

・大阪市立大学・上海師範大学共同セミナー「唐宋社会における文化力」

2010 年 6 月 12 日，大阪市立大学文学部棟会儀室

主催：UCRC（重点研究），上海師範大学

第 1 部　唐代の文化力

司会：平田茂樹（大阪市立大学）

俞鋼（上海師範大学）「從唐人小說看科舉士子漫遊聚會的風習」，室山留美子（大阪市立大学）「北魏墓誌研究における新しい可能性に向けて」，夏廣興（上海師範大学）「唐代文人與楞伽經」，村井恭子（神戸大学）「唐宣宗期の西北辺境政策」，張劍光（上海師範大学）「唐五代江南農村市場」

第 2 部　宋代の文化力

司会：井上徹（大阪市立大学）

尹玲玲（上海師範大学）「淺論江瀆神信仰的流變--基於宋代三峽新灘滑坡災害的討論」，久保田和男（長野工業高等専門学校）「五代北宋における複都制の研究」，黄純豔（上海師範大学）「宋朝對境外資訊的搜集和處理」，平田茂樹（大阪市立大学）「書儀より見た宋代の政治構造」，湯勤福教授（上海師範大学）「義理史學與宋代史學的社會傳播」

・上海師範大学・大阪市立大学国際共同セミナー「中日両国の伝統都市と市民生活」

2010 年 9 月 25 日，上海師範大学文苑楼

開幕式　　司会：銭杭（上海師範大学），挨拶：唐力行（上海師範大学）

第 1 セッション　　司会：銭杭（上海師範大学）

邵雍（上海師範大学）「抗日戦争時期的上海滑稽」，高紅霞（上海師範大学）「閩粤商人与上海的信仰」，洪煜（上海師範大学）「蘇州評弾・小報・上海：都市消費文化」，申浩（上海師範大学）「明清時期蘇州地区的評弾文化与社会生活」，周巍（上海師範大学）「技芸与性別―晩清以来江南弾詞的形象塑造与性別論述」，姚霏（上海師範大学）「晩清上海的妓業空間与両性関係」

第 2 セッション　　司会：井上徹（大阪市立大学）

村田正博（大阪市立大学）「都市の暮らしと和歌の伝統」，井上徹「明末における都市広州の社会構造と米騒動」，塚田孝（大阪市立大学）「日本近世身分社会の特質―大阪の非人を事例に」，松浦恒雄（大阪市立大学）「四大名旦と特刊」，佐賀朝（大阪市立大学）「伝統都市から近代都市へ―19 世紀大阪の都市内地域を素材に―」，平田茂樹（大阪市立大学）「宋代の首都における政治空間」，辻高広（大阪市立大学）「清末地方都市の公共事業実施よりみた知県と紳士との関係」

・関西比較中世都市研究会　第 1 回

2010 年 10 月 1 日（金）大阪市立大学文化交流センター

仁木宏（大阪市立大学）「図像（イメージ）の中の日本中世都市」，コメント：村上司樹（大阪市立大学）

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/krgcsmc/index.html

・日中伝統芸能競演会「文楽素浄瑠璃と評弾の集い」（大阪市立大学創立 130 周年記念事業）

主催：大阪市立大学大学院文学研究科・文学部，UCRC（重点研究）

共催：上海師範大学中国近代社会研究センター，大阪市立大学都市研究プラザ，財団法人文楽協会

2010 年 10 月 9 日，大阪市立大学学術情報総合センター大会議室

総合司会：村田正博（大阪市立大学），挨拶：西澤良記（大阪市立大学長），挨拶：松浦恆雄（大阪市立大学）

第 1 部

評弾解説：周震華（上海評弾団副団長），岩本真理（大阪市立大学），評弾演者：高博文（上海評弾団），朱琳（上海評弾団），

第 2 部

浄瑠璃解説：阪口弘之（大阪市立大学名誉教授），素浄瑠璃演者：竹本住大夫（人間国宝），三味線：野澤錦糸

鼎談「伝統：未来への眼差し」

司会：高島佐知子（大阪市立大学都市研究プラザ），竹本住大夫，高博文，通訳：岩本真理（大阪市立大学），劉慶（大阪市立大学）

・日中伝統芸能研究交流会

2010 年 10 月 9 日，大阪市立大学文学部棟会儀室

趣旨説明：井上徹（大阪市立大学），周震華（上海評弾団副団長）「評弾音楽」，松浦恆雄（大阪市立大学）「評弾演劇化の試み」，岩本真理（大阪市立大学）「呉語資料としての評弾演出本～“辰光”をめぐって」，久堀裕朗（大阪市立大学）「『伊賀越道中双六』の上演史」，劉慶（大阪市立大学）「古籍に見る明清時代『評弾』及びその興業の有り様―蘇州評弾を中心に」，総合討論

(2) 個別研究プロジェクト関係

・萬年社コレクション 調査研究プロジェクト

＊下欄の「アーカイブス事業（萬年社コレクションの整理調査）」参照

・International Coference on Female Life Course in a Globalization Society（主催：台湾国立政治大学，共催：財団法人台湾民主基金会）に出席し，報告を行った（谷富夫）。

・第 5 回全球都市全史研究講演会『南アジアのメガ・シティ研究（1）　ムンバイの歴史的形成と現在』（主催：地球研「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト」プロジェクト，京都大学百万遍キャンパス，総合研究 2 号館，2010 年 10 月 29 日）において，「19 世紀の産業資本の形成と都市建設」と題して報告（野村親義）。

(3) 出版

早瀬晋三編『フィリピン関係文献目録（戦前・戦中，「戦記もの」）』龍溪書舎，2009 年 11 月。大黒俊二『声と文字』岩波書店，2010 年 2 月。井上徹・辻高広共編『大阪市立大学・上海師範大学共同セミナー成果報告書』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター，2010 年 2 月。大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター編『都市の歴史的形成と文化創造力』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター，2010 年 3 月。塚田孝編『近世身分社会の比較史（国際円座報告書）』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター，2010 年 3 月。松浦恆雄「文化大革命時期の戯単」『文化大革命の文化史的再考　科研報告書』2010 年 3 月。仁木宏『京都の都市共同体と権力』思文閣出版，2010 年 6 月。平田茂樹『宋代政治構造研究』（上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社，2010 年 8 月。塚田孝『近世身分社会の捉え方―山川出版社高校日本史教科書を通して―』社団法人部落問題研究所，2010 年 11 月。谷富夫『よくわかる質的社会調査　プロセス編』ミネルヴァ書房，2010 年 11 月。

＜重点研究運営会議＞

2009 年度第 5 回　2009 年 11 月 6 日（金）11:00～11:30
2009 年度第 6 回　2009 年 12 月 11 日（金）11:00～13:00
2009 年度第 7 回　2010 年 1 月 15 日（金）11:00～12:00
2010 年度第 1 回　2010 年 7 月 16 日（金）10:00～11:00
2010 年度第 2 回　2010 年 10 月 1 日（金）16:30～18:00
2010 年度第 3 回　2010 年 10 月 29 日（金）16:30～18:00

＜重点研究方針策定会議＞

第 1 回　2010 年 3 月 2 日（火）　17:00～18:30
第 2 回　2010 年 3 月 22 日（月）　16:30～18:30
第 3 回　2010 年 4 月 9 日（金）　16:00～18:00
第 4 回　2010 年 4 月 23 日（金）　15:00～16:30
第 5 回　2010 年 5 月 7 日（金）　15:00～17:00
第 6 回　2010 年 5 月 24 日（月）　15:00～17:00

都市問題研究の活動 I

大場茂明（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学大学院文学研究科都市問題研究プロジェクト「『住みごたえのある町』をつくる－大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント－」は，2009 年 6 月に採択された（研究助成期間は 2009 年度～2011 年度の 3 ヶ年）。

このプロジェクトは，専門分野を異にしながらも都市文化や市区再生に関心を持つ日独双方の研究者が集い，大阪市立住まい情報センター，ハンブルク市都市更新・都市開発公社（steg）と連携しつつ，様々なアクターが関与する文化活動を基礎に置いた具体的な「まちづくりモデル」を提案することを目的とするものである。

○研究メンバー

代表：大場茂明（地理学）
共同研究者：北村昌史（西洋史），高梨友宏（哲学），久

堀裕朗（国文学），海老根剛（表現文化学）（以上，文学研究科教員），ガブリエレ・フォークト（ハンブルク大学），ディルク・シューベルト（ハンブルク・ハーフェンシティ大学），ハンス・ヨアヒム・レスナー（steg：ハンブルク市都市更新・都市開発公社代表），クルト・ラインケン（steg 不動産部門責任者）

○研究実績と今後の予定（一部昨年度末の実績を含む）

・2010 年 3 月 7 日　公開フォーラム「映像でみるドイツ・ハンブルクの暮らし－大阪下町との意外な共通点とは？－」（共催：大阪市立住まい情報センター，会場：大阪市立住まい情報センター・研修室）

　九条地区ならびにハンブルク再生事業地区にて撮影した映像を紹介するとともに，2009 年度の研究成果を報告した（参加者：約 70 名）。

・2010 年 5 月 19 日　大阪市立住まい情報センターとの研究打ち合わせ

・2010 年 7 月 27 日　九条地区（大阪市西区）と地元関係者との研究打ち合わせ

●8 月下旬には，ハンブルクよりシューベルト，レスナー，ラインケンの 3 氏が来日し，3 日間にわたり下記の事業を行った。

・2010 年 8 月 22 日

国際シンポジウム「イベント・下町・エリアマネジメント～大阪・ハンブルクの取組みから～」の開催（会場：大阪市立住まい情報センター・ホール，参加者：約 85 名），主催：大阪市立大学大学院文学研究科，共催：大阪市立住まい情報センター，後援：大阪市，ドイツ連邦共和国総領事館，ドイツ文化センター・大阪，大阪・ハンブルグ友好都市協会

＜第 1 部＞　ドイツにおける市民文化に基づく市区更新

（総合司会・久堀裕朗）

趣旨説明（大場茂明），「地区開発と住みごたえ－保全と増価とを結ぶ都市更新」（ディルク・シューベルト），「ドイツにおける再開発事業の担い手の現状と課題－文化アイデンティティは単なる感情の産物か，それとも具体的な欲求か？」（ハンス・ヨアヒム・レスナー）

＜第 2 部＞　住みごたえのある町を目指す大阪・ハンブルクの取組み

「地域資源と担い手－住みごたえのある町をつくるための前提条件」（大場茂明），「観光ボランティアの案内で九条の町を楽しく歩く」（谷口靖弘，大阪・九条下町ツアー主宰），「ザンクト・パウリは住みごたえのある町か？」（クルト・ラインケン），パネルディスカッション（司会進行・高梨友宏）

あわせて，会場前ロビーではハンブルク市の地図・写真等の展示，ビデオ上映を行った（担当：海老根剛）。

・2010 年 8 月 23 日

大阪九条地区巡検と地元関係者との意見交換，大阪市立住まいのミュージアム見学

・2010 年 8 月 24 日

泉北ニュータウン巡検，堺・向丘団地 UR 実証実験見学会と UR 事業担当者との意見交換，「大阪／ハンブルク　リノベーション・ワークショップ」（共催：大阪市立大学都市研究プラザ，会場：大阪市立大学文化交流センター・ホール）の開催（参加者：約 40 名）

・2011 年 3 月 31 日～4 月 14 日（予定）

都市計画・都市文化を専攻するハンブルク・ハーフェンシティ大学の大学院生グループが来日し，大阪市内をフィールドに「まちなか居住」に関する調査を行う予定。

●2010 年度の活動を受けて，来年度においても大阪・ハンブルク双方で，まちづくりへの市民文化の活用に関する定例研究会を積み重ねる。また，「市民文化に基礎を置いた地区活性化モデルの提案」，「まちなか居住の魅力」をテーマに，ハンブルクで夏期にシンポジウムを開催し，互いの研究成果について討議する。10 月以降には 3 年間の共同研究の成果をまとめていく予定である。

　なお，今年度の事業実施にあたって，以下の方々には多大なるご協力をいただいた。記して謝意を表する（敬称略）。谷口靖弘（大阪芸術大学短期大学部教授，大阪・九条下町ツアー主宰），久坂斗了（UR サポート都市再生業務本部　都市再生企画部長），玉井明子（大阪市立住まい情報センター　住まい・まちづくりネットワーク企画担当），杉岡数幸（グリュック翻訳工房代表），和田展子（大阪日独協会常務理事），長谷川健一（文学研究科講師），アニカ・シュルツェ（ハンブルク・ハーフェンシティ大学）

都市問題研究の活動 II

塚田　孝（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学都市問題研究プロジェクトとして研究課題「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」（研究代表：塚田孝）が 2010 年度から 3 ヶ年にわたって認められた。

本研究は，近世都市大坂の豊かな歴史像を，具体的な史料の解説を通して提示するテキストの開発を目的としている。その対象は，学生及び博物館利用者（外国人を含む），さらに広く市民を想定し，本学での共通教育や博物館の市民向け講座のテキストとして利用することを意図している。さらに博物館史料の解説書とすることも

想定している。

研究代表の塚田のほか，佐賀朝（文学研究科），谷直樹（生活科学研究科），飯田直樹（大阪歴史博物館），八木滋（大阪歴史博物館），渡辺祥子（元文学研究科大学院学生），岩本馨（京都工芸繊維大学），ダニエル・ボッマン（イェール大学），ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学）が共同研究者として加わり，研究実施体制を組んでいる。日常的には，塚田・佐賀・八木が運営事務局を構成し，若手研究者（PD）や院生の協力も得て事業を進めている。

本研究全体としては，基礎編（1 冊）と応用編（2 冊《人と役職編》・《仲間編》）さらに英文編の作成を予定している。しかし，今年度の申請予算が半減されたため，現在，基礎編の作成に集中して研究を進めている。

以下の会議・研究会を行った。

2010 年 9 月 19 日（日）運営事務局会議（拡大）。10 月 18 日（月）運営事務局会議（拡大）。11 月 23 日（火）運営事務局会議。12 月 22 日（水）テキスト案検討研究会ならびに運営事務局会議（拡大）

ティモシー・エイモス氏の来日に合わせて，12 月 9 日・10 日に集中して英文編の方向性と可能性について個別の検討・打合せを行った。

現在，大阪市立大学学術情報総合センター所蔵の近世史料・日本経済史資料と大阪歴史博物館所蔵史料などからテキスト収載の史料選定と解説のための周辺史料収集のための調査を進めるとともに，以下の 9 テーマについて，史料（仮選定のもの：変更の可能性あり）の翻刻，現代語訳，語句説明，解説の作業を行っている。

①三郷絵図，②安井家の由緒書，③浪人の居住請合（安井家），④水帳（空間）（木挽町北之丁），⑤人別帳と宗旨巻（綿袋町／菊屋町／道修町三丁目），⑥町掟（道修町三丁目），⑦町年寄の選任（雛屋町），⑧家屋敷の売券，⑨借屋請状（家請人）

なお，これらの作業の成果を，塚田の共通教育科目「歴史のなかの大阪」（二部・後期）の授業と八木の大阪歴史博物館市民講座（連続 4 回）において試用し，テキストの改良をはかる作業を行っている。

上方文化講座 2010〈一谷嫩軍記〉

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

2010 年度の上方文化講座は，昨年度までに取り上げた三大名作同様，現在の文楽でも頻繁に上演される名作『一谷嫩軍記』に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として，竹本津駒大夫，鶴澤清介，桐竹勘十郎の三師を迎え，文学研究科教員とともに，8 月 24 日から 26 日までの 3 日間（連日 9:30〜16:00），大阪市立大学学術情報総合センター大会議室を会場にして，人形浄瑠璃文楽や『一谷嫩軍記』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募者多数の中から抽選で選ばれた一般市民約 100 名と，学生約 50 名が受講。授業内容は以下の通り。

8 月 24 日（火）

並木宗輔の浄瑠璃（久堀裕朗・大阪市立大学），『一谷嫩軍記』解説（久堀裕朗），『一谷嫩軍記』〔三段目〕講読①（久堀裕朗），直実伝承の虚実（小林直樹・大阪市立大学大学院文学研究科）

8 月 25 日（水）

『一谷嫩軍記』〔三段目〕講読②（久堀裕朗），浄瑠璃の言語（丹羽哲也・大阪市立大学大学院文学研究科），『一谷嫩軍記』―太夫・三味線の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介），『一谷嫩軍記』―太夫・三味線・人形の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

8 月 26 日（木）

近世大坂の芝居地と遊女商売（塚田孝・大阪市立大学），楊家将の物語と芝居（松浦恆雄・大阪市立大学），桐竹勘十郎師に聞く―実演をまじえて（桐竹勘十郎），文楽の至芸―太夫・三味線・人形，三業一体の舞台（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

アーカイブス事業（萬年社コレクションの整理調査）

石田佐恵子（文学研究科教授，常任研究員）

2009 年度に引き続き，大阪市立近代美術館建設準備室の協力の下，萬年社コレクションのビデオ・テープ類および紙・ 印刷資料類の調査研究を進めている。費用面では，吉田秀雄記念財団研究助成金，外部研究寄付金（（株）毎日エス・ピー・シー），科学研究費補助金（データベース作成事業：京都精華大学との共同研究），公益信託高橋信三記念放送文化振興基金を獲得し，作業を進めている。

2010 年度上半期の進捗状況は，以下の通り。

（A）文書及び印刷資料の整理と調査

未開封の段ボール箱（PP401〜）を開封し，社史関係 23 箱，博覧会・イベント関係 10 箱，広告作品・スクラップ 2 箱，日常営業活動関係 14 箱，古資料 11 箱の合計 60 箱の概要を把握した。現在までのところ，社史関係 8 箱 192 点については整理を終え，目録を作成した。大型

古資料 28 包みと，上記段ボールのうちの古資料 11 箱を合わせて整理し直し，現在までに 92 箱 127 冊 7815 点（PP201〜327）の目録を作成し終えた。

（B）フィルム・テープ・ビデオ類の目録データベースの作成，デジタル化と整理

ビデオ・テープ類：203 箱すべての目録を完成。UCRC のホームページで公開した。

京都精華大学と共同のプロジェクトにより，前年度末に，テープ類 203 箱約 9000 本のうち 7 箱 153 本をデジタル化した。この試験的作業の結果をふまえ，5 月にテレビ CM のデジタル化の手順を定め，対象とする資料を 114 箱（テープ概算 3417 本）と確定した。現在までのところ，18 箱 359 本のデジタル化を終え，そのうち 17 箱，テープ 334 本，テレビ CM1116 点までの目録を作成し終えた。

昨年度デジタル化したラジオ CM の歌詞と台詞の採録を完成させた。その成果である 265 種類 1436 点のラジオ CM のデータを，テレビ CM のデータベースに統合した。また，ラジオ CM の残りの資料については，後半期に別途助成金を得たので，今後デジタル化作業を計画中である。

（C）関係者へのインタビュー調査

萬年社 OB10 名への聞き取り調査を終了し，インタビュー原稿を作成した。

（D）プロジェクト報告会の開催

・第 1 回萬年社コレクション調査研究プロジェクト報告会
＊詳細は前掲
2009 年 11 月 28 日（土）13:30〜16:30
会場：大阪市立大学文化交流センター大ホール
・第 2 回萬年社コレクション調査研究プロジェクト報告会
2010 年 12 月 4 日（土）13:30〜16:30
会場：大阪市立大学文化交流センター大ホール

文学研究科叢書編集委員会

谷　富夫（文学研究科教授，常任研究員）

研究科叢書は現在，第 7 巻「都市の歴史的形成と文化創造力」の編集作業を行っている。これは，2010 年 1 月に行われた重点研究にともなうシンポジウムの報告が中心であり，執筆者は井上徹，仁木宏，高橋修，呉松弟・馬峰燕，早瀬晋三，吉澤誠一郎，サスキア・サッセン，青木秀男，高畑幸，祖田亮次，野村親義，妻木進吾の 13 名（論文 12 本）である。2010 年度中に刊行の予定である。

『都市文化研究』編集委員会

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

① 2010 年度委員

海老根剛（文学研究科准教授，表現文化学），川野英二（文学研究科准教授，社会学），久堀裕朗（文学研究科准教授，国語国文学，編集委員長），佐伯大輔（文学研究科准教授，心理学，13 号編集主任），佐賀朝（文学研究科准教授，日本史学），祖田亮次（大学院文学研究科准教授，地理学），平田茂樹（大学院文学研究科教授，東洋史学），イアン・リチャーズ（大学院文学研究科准教授，英語英米文学）

② 昨年度からの変更

・編集主任　仲原孝・海老根剛（2009 年度）→佐伯大輔（2010 年度）
・執筆要項　投稿ジャンルを記す項目に「海外レポート」を追加した。

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

山﨑孝史（文学研究科准教授，常任研究員）

2009 年 10 月に発足した UCRC 電子ジャーナル編集委員会は山﨑孝史（文学研究科教授，地理学，編集主任），小田中章浩（文学研究科教授，表現文化学），野村親義（文学研究科准教授，東洋史学），中川眞（文学研究科教授，アジア都市文化学）から構成され，2010 年 6 月 1 日に UrbanScope を創刊した（URL は http://urbanscope.lit.osaka-cu.ac.jp/index.html）。

UrbanScope は，主として本研究科の教員および若手研究者が，とりわけ国際的価値のある研究成果を英文で国際的に発信し，引用されうる媒体として企画され，Web 上でアクセス・ダウンロードが可能なオープンアクセス・ジャーナルの形態をとっている。掲載論文は「論文 article」，「ノート note」，「翻訳 translation」から構成されるが，研究成果の国際発信という観点から翻訳を重視し，創刊号では日本文学と日本史学の既刊日本語論文を 2 本英訳した。英訳に際しては，各分野に通じた翻訳者を採用し，原著者・翻訳者・編集委員間での協議・調整を経て翻訳を進める体制をとっている。

2011 年 4 月に刊行予定の第 2 号では，創刊号同様に

日本文学と日本史学の既刊日本語論文の翻訳を掲載するとともに，他の論文カテゴリーの投稿を受け付け，日本内外のピア・レヴューを経た英語論文の掲載を予定している。また，2010 年度後期より UCRC 事務員の岡村俊史氏とフリーランス翻訳家のスティーブン・エバンス氏を編集スタッフに加え，編集体制の拡充を図っている。

科学研究費申請を支援する事業

仁木　宏（文学研究科教授，UCRC 副所長）

文学研究科教員や，UCRC ドクター研究員などの若手研究者の研究条件向上の一施策として，文部科学省・日本学術振興会の科学研究費補助金申請を支援する事業を今年度も行った。

科学研究費補助金申請アドバイスの会（教員向け）

2010 年 10 月 13 日。近年，科学研究費の採否にかかわる審査員をつとめた経験がある，文学研究科関係教員など 2 名から，申請書作成のポイント，審査基準の内容などについて，アドバイスを行った。

文学研究科若手研究者のための科研費申請対策講座 2009

2010 年 10 月 13 日，15 日。文学研究科関係教員より，申請書作成の注意点，審査の実態などについてアドバイスを行った。

釜山大学校韓国民族文化研究所との学術交流

仁木　宏（文学研究科教授，UCRC 副所長）

釜山大学校韓国民族文化研究所は，歴史・文学・言語・政治などの諸分野の研究者によって構成され，韓国文化，地域学，日韓関係などを研究している。2009 年 10 月に締結された，「大阪市立大学都市文化研究センターと釜山大学校韓国民族文化研究所との間の学術交流に関する協定書」にもとづき，(1) 教員・大学院生および研究者の交流，(2) 学術資料及び研究情報の交換，(3) 共同研究及び共同学術会の企画・運営など，幅広い交流を進めてゆく予定である。

釜山では，2010 年 5 月，学術講演会で仁木宏が，6 月には，The 2nd International Symposium, “Locality, Beyond the Border of Space and Cognition” で中川眞氏と堤圭史郎氏（福岡県立大学）がそれぞれ講演・報告した。また 2011 年 2 月には，大阪で共同シンポジウムを開催する予定である。

ドクター研究員による研究プロジェクト

仁木　宏（文学研究科教授，UCRC 副所長）

すべてのドクター研究員に研究費を支給するのではなく，希望する研究員から申請をうけつけ，すぐれたプロジェクトに資金援助することで若手研究者の研究支援を行っている。

2009 年度は，下表の 10 件を採択した。文学研究科長裁量経費や重点研究より支援を得，各プロジェクトに 100,000 円を上限に支給した。この金額で足りない研究資金は自己負担してもらうことになる。

それぞれのプロジェクトは，ドクター研究員が研究代表者となり，他のドクター研究員や院生・学生を研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置しているが，プロジェクトの遂行はあくまでドクター研究員によるものである。

各プロジェクトの詳しい内容，成果については，別掲の報告（成果報告）参照。

表　2009 年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	ルクセンブルク共通語（コイネー）研究	田原 憲和★ 磯部 美穂	神竹 道士
2	文化的秩序の再建と都市景観の形成 －中国知識人社会と地域名勝の相互作用－	王 標★	山口 久和
3	都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化と異文化受容	向井 有理子★ 田端 拓哉 宮崎 弦太	池上 知子
4	戦国期畿内都市史のための軍記史料『細川両家記』の研究　―歴史学・考古学・国文学による学際的アプローチの試み―	古野 貢★ 村井 良介 天野 忠幸	仁木 宏
5	ルーマニア・モルドヴァ地方の教会堂外壁画，通称〈コンスタンティノープル包囲〉と「コンスタンティノープル陥落」事件との関連について	早川 美晶★	井上 浩一
6	GHQ占領期大阪における在日朝鮮人メディアの歴史社会学的研究	小林 聡明★	土屋 礼子
7	ダニエル・ボッツマン著 “Punishment and Power in the Making of Modern Japan” (Princeton UP)を精読し書評する日本近世史・近代史合同研究会	西尾 泰広★ 山崎 竜洋 山下 聡一	塚田 孝
8	歌謡の研究	根来 麻子★ 高重 久美	村田 正博
9	戦間期における地方紙の軍に関する報道と世論形成―『京都日出新聞』の軍縮報道を事例に―	中嶋 晋平★	土屋 礼子
10	近代短歌の発生と展開についての研究 －佐佐木信綱における短歌革新の解明をとおして－	足立 匡敏★	村田 正博

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの

2010 年度は，下表の 9 件を採択し，研究活動を開始した。予算，体制などは 2009 年度までと同じである。

各プロジェクトの詳しい内容，成果については，別掲の報告（中間報告）参照。

表　2010 年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	日本古代の墓誌の再検討	牧 飛鳥★	栄原 永遠男
2	日本近世における流通と地域社会についての研究　―近世大坂を中心に―	羽田 真也★ 三田 智子 山下 聡一	塚田 孝
3	軍記史料『細川両家記』の畿内戦国期史料としての再設定に向けた歴史学的総合研究 ―戦国期畿内都市史研究の一環として―	古野 貢★ 村井 良介 藤本 誉博	仁木 宏
4	イギリス帝国における植民地教育政策の系譜 ―両大戦間期・英領ゴールド・コースト植民地での教育政策の位置づけ―	桑島 穏★	大黒 俊二
5	多層化する「監視」と現代社会 ―グローバル化／都市空間／メディア―	松井 広志★	石田 佐恵子
6	旧「萬年社」所蔵資料と出版物の調査に基づいた関西の広告史研究	竹内 幸絵★	石田 佐恵子
7	ルクセンブルク語コイネー研究会	田原 憲和★ 齊藤 公輔	神竹 道士
8	ポストモダンの身体表現と重力の意味作用に関する研究	野田 はるか★	小田中 章浩
9	上海租界をめぐる中国人学生の国際移動に関する研究 ―旧大阪商科大学を事例に―	佐藤 量★	中川 眞

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの

2009 年度ドクター研究員プロジェクト成果報告

1. 田原憲和「ルクセンブルク語コイネー研究プロジェクト」

本プロジェクトでは 2009 年 7 月と 2010 年 1 月に研究会を，2009 年 10 月には講演会を開催した。それぞれの催しについての詳細は以下に記す。

ルクセンブルク語コイネー研究会（第 1 回）　2009 年 7 月 8 日（土）　参加者 6 名　於：大阪市立大学学術情報センター会議室

総合テーマ「ルクセンブルク語の識字化について」

①田原憲和（プロジェクト代表者，大阪市立大学）「ルクセンブルク語の母音に関する考察」，②小川敦（招待講師，一橋大学）「ホフマンの三言語主義に関する若干の考察」，③木戸紗織（研究協力者，大阪市立大学）「ルクセンブルク語聖書をめぐる状況」

ドイツ語という大言語の一部とみなされてきたルクセンブルク語に正書法が与えられ，書きことばとして発展していく過程とその意義について活発な議論が交わされた。ルクセンブルク独立直後の 19 世紀半ば，第 2 次世界大戦直後，現在という 3 つの異なる時代に関しての報告であり，ルクセンブルク語の識字化を巡る流れを明確にすることができたことは大きな成果である。

ルクセンブルク語コイネー研究会（第 2 回）　2009 年 10 月 24 日（土），講演会，参加者 7 名，於：大阪市立大学梅田サテライト

講演：田村建一（招待講師，愛知教育大学）「ルクセンブルクにおける言語教育をめぐる議論とそこから見える国民アイデンティティ」

本講演会では，ルクセンブルクの言語教育にとりわけ深い見識を持つ田村氏を迎え，3 時間にわたり報告と議論が行われた。議論の中心はルクセンブルクの人口の約 4 割を占める外国人に生じている言語習得上の問題点についてである。ドイツ語研究者，フランス語研究者，英語研究者によるそれぞれの立場からの質問も多く出され，活発かつ多面的な議論が行われた。その中で，ルクセンブルクにおけるルクセンブルク語の位置づけについての理解が深まった。

ルクセンブルク語コイネー研究会（第 3 回）　2010 年 1 月 10 日（日），参加者 7 名，於：大阪市中央公会堂

総合テーマ「ルクセンブルク語とドイツ語の差別化について」

①木戸紗織「ルクセンブルク語訳聖書に関する小アンケート」，②小川敦「フェルナン・ホフマンと言語イデオロギーについて」，③田原憲和「ルクセンブルク語母音にみるディックスとハルトの言語感覚の親近性」

ドイツ語からのルクセンブルク語の差別化の実践例について報告が行われた。本研究発表会では，差別化を図る根源の問題についてとりわけ活発な議論が行われた。各時代に共通する問題点を確認することができたことは大きな成果である。

本プロジェクトの成果の一部は，Seminarium 第 31 号（大阪市立大学ドイツ文学会，2009 年 12 月発行）に掲載している。また，2010 年 12 月ごろ発行予定の論文集「ルクセンブルク学研究」第 1 号（ルクセンブルク語コイネー研究会）おいてプロジェクト全体の成果を公表する予定である。

2. 王標「文化的秩序の再建と都市景観の形成 ―中国知識人社会と地域名勝の相互作用―」

2009 年度の本プロジェクトでは宋犖と滄浪亭の再建を考察した。

宋犖（1634-1713，河南商邱の人）は清代前期に政府要人の地位を以て文壇を主宰した人物であり，かつて順治帝の侍衛を務め，康熙 3 年（1664）に湖北黄州推官となり，27 年（1688）に江西巡撫に進み，31 年（1692）に江蘇巡撫に遷り，44 年（1705）に吏部尚書に上った。宋犖は湖北・江西・江蘇の任官中に大勢の文人を網羅し，一つの文人集団を形成した。

著名な庭園滄浪亭は五代時代のものであるが，滄浪亭

自体は北宋の慶暦 5 年（1045）に詩人蘇舜欽によって隠居の地として築造されたものである。元明時代（1271-1644），滄浪亭は廃れて仏教寺院となった。宋犖は江蘇巡撫在任中にその遺跡を訪ね，近くの山上に再建し，康熙 35 年（1696）2 月に完成した。

蘇舜欽の再発見と滄浪亭の再建は実は清初詩壇の「宗宋」（宋詩を宗とする）ブームに関わっている。清初の「宗宋」は明代の「宗唐」（唐詩を宗とする李攀龍らの復古主義・擬古主義）に対する反動であると同時に，異民族のモンゴル（元）に滅ぼされた宋代の漢民族の正統的な文化が明の遺民たちに故国への思いを募らせたからである。

研究方法として，まず，文献学的調査を踏まえ，『紹定呉郡志』・『続呉郡志』・『崇禎呉県志』・『乾隆蘇州府志』・『蘇州古城地図』・梁章鉅『滄浪亭志』などの地方志を駆使し，滄浪亭の歴史や立地変遷（池畔→山上）などを考察し，さらに『蘇学士文集』・『蘇舜欽資料匯編』・『滄浪小志』などの文献資料を用い，蘇舜欽と宋犖の「滄浪亭」という隠居空間に対する認識の相違を分析する。次いで，宋犖の『西陂類稿』・『緜津山人詩集』・『漫堂年譜』や尤侗の『西堂全集』などの資料を用い，宋犖と蘇州の文人たちとの交遊関係を再現し細かく分析することを通し，景観の再建が如何にして清初の文化的政治的秩序の再建に役立ったのかを明らかにしたいと考える。

2009 年度ドクター研究員プロジェクト研究費を活用し，上述の『蘇州古城地図』や『蘇舜欽資料匯編』などの書籍を購入した。現段階では，関連の文献資料・先行研究の収集作業が終わり，それらの文献資料を精読しながら，「宋犖と滄浪亭の再建」と題する論文を執筆中である。

本プロジェクトの研究成果として，論文を『都市文化研究』13 号に投稿する予定であるが，執筆中に，一つの意外な事実に気付いた。つまり，それまでに宋犖と交遊関係を持った明遺民の友人たちが彼の交遊ネットワークから突如姿を消したことである。それは清朝の文化的支配が確立する過程の中に存在した地域的特徴の反映であるに違いないものの，その問題を深く理解しようとすれば，江蘇以外の地域の状況を比較しなければならない。また，江蘇で行われた文化的秩序の再建活動を先の江西巡撫時代の文化的政策の延長線上に置いて考察しなければならない。こうしてこそ，清初の文化的秩序の再建の全体像を明らかにすることができる。それ故に，2010 年度は新たに「清初江西における文化的秩序の再建 —— 江西巡撫宋犖とその交友を中心に ——」というテーマで，UCRC ドクター研究員を申請した。現在，同題の論文は完成し，『都市文化研究』13 号に投稿した。

今後，その研究成果を踏まえ，「宋犖と滄浪亭の再建」を加筆，修正し，改めて『都市文化研究』14 号に投稿する予定である。

3. 向井有理子「都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化と異文化受容」

本研究は，都市的環境がもたらす心的特徴である複雑で多様な社会的アイデンティティが異文化受容に与える影響を検討することを主たる目的としている。また，アイデンティティの複雑化と他の心理特性との関連も検討することで，これが異文化受容を促進するメカニズムを明らかにすることも検討課題とした。方法は以下の通りである。

［調査］

期間：2009 年 4 月から 6 月に集合調査による質問紙調査を実施した。

対象：都市部にある大学に在籍する大学生　計 762 名。

場所：大阪市立大学，四條畷学園大学，関西大学の心理学関連の授業時間の一部を利用した。

内容：調査は回答者の負担を軽減するため，調査冊子を前半（Part 1）と後半（Part 2）に分割し 1 週間の間隔をおいて 2 回に分けて実施した（ただし，関西大学では Part 2 のみを実施した）。Part 1 では，文化的自己観，自尊心，愛着スタイル，愛着対象の有無，死生観，日本的慣習の実践，と異文化への態度，Part 2 ではアイデンティティの複雑性，友人関係のスタイルを測定した。調査協力者数は Part 1 が 550 名（男性 280 名，女性 270 名），平均年齢 18.6 歳（標準偏差 1.03 歳），Part2 は 675 名（男性 328 名，女性 345 名，不明 2 名），平均年齢 18.9 歳（標準偏差 1.22 歳），Part 1 と Part 2 の両方に回答した協力者は 462 名（男性 228 名，女性 234 名），平均年齢 18.5 歳（標準偏差 1.02 歳）であった。

［研究成果・課題］

成果：本調査の分析から，社会的アイデンティティがより複雑であるほど外国人受容が促進される可能性がある程度示され，都市的であると考えられる心的特徴が異文化受容の促進要因となりうることが明らかとなった。この主たる成果については下記の 2-①にて発表する予定である。さらに以下の 1-①，1-②，1-③，3 では本調査の結果の一部を発表している。

課題：都市的な特徴とされる社会的アイデンティティの複雑性が異文化受容に影響するプロセスや条件については十分に明らかにできなかった。また，異文化受容，外国人受容についてもより詳細な側面に分けて検討する必要がある。

学会発表

1. 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイ

ナミックス学会第 56 回大会合同大会（2009 年（平成 21 年）10 月 10 日（土），11 日（日），12 日（月），於大阪大学吹田キャンパス）

①宮崎弦太・向井有理子・田端拓哉・池上知子「友人関係の単一－多重送信性と拒絶のサインへの感受性－愛着傾向による調整効果に注目して－」（10 月 10 日，口頭発表）

②田端拓哉・向井有理子・宮崎弦太・池上知子「アイデンティティの多様性がレジリエンスにもたらす影響」（10 月 10 日，ポスター発表）

③向井有理子・宮崎弦太・田端拓哉・池上知子「存在脅威管理理論における不安緩衝機能と異文化受容の関係－文化的自己観による違い－」（10 月 12 日，ポスター発表）

2. 日本社会心理学会第 51 回大会（2010 年（平成 22 年）9 月 17 日（金），18 日（土），於広島大学）
向井有理子・宮崎弦太・田端拓哉・池上知子「社会的アイデンティティの多様性と外国人受容の関連」（9 月 18 日，ポスター発表（予定））

雑誌掲載

宮崎弦太・田端拓哉・池上知子「友人関係の単一－多重送信性と都市的環境への適応－都市部大学生を対象として－」，『都市文化研究』，12 号，77-88.

4. 古野貢「戦国期畿内都市史のための軍記史料『細川両家記』の研究 ―歴史学・考古学・国文学による学際的アプローチの試み―」

研究協力者：藤本史子（大手前大学），藤本誉博，稲垣翔（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院生），石本倫子（関西大学））

1. プロジェクトの目的，成果

①目的：昨年度プロジェクトの成果をふまえ，戦国期畿内都市史研究進展のために，『細川両家記』のテキストとしての評価（著者の立場・地位，認識，情報への接し方・処理の方法など）や，叙述の相対化について，継続的な分析を行った。（1）昨年度分析した写本に加え，さらに未検討の諸写本を校合し，『細川両家記』の最も古態に近い記述を探るとともに，他の軍記史料との系譜関係などから，同史料の成立について検討した。（2）一次史料・考古学的成果との比較による分析により，『細川両家記』の位置づけ，著者生嶋宗竹の視点の明確化，都市を拠点とした諸権力の権力構造，畿内都市史の再検討を行った。

②作業：（1）『細川両家記』の諸写本間の表現方法や用語の差異の確認のため，月 3 回程度の研究会を開催し，昨年度未検討の諸写本（彰考館本，加賀市立図書館蔵聖藩文庫本，尊経閣文庫本，神宮文庫本）との校合作業，史料批判を継続した。（2）諸写本の系譜関係，成立年代の近い他の軍記史料との関係について，底本確定の方法やその意義について，国文学の研究手法・成果から学ぶため，同分野における戦国期畿内軍記史料の研究者である瀬戸祐規氏を講師として招き，2010 年 1 月 26 日・2 月 16 日の 2 回，勉強会を行った。

③今年度の成果：（1）昨年度の成果と合わせ，より精密な『細川両家記』諸本の類型・系譜を明らかにできる情報の収集を進めた。（2）歴史学的なテキスト解釈・理解にとどまらず，国文学的な解釈・理解の方法を得て，『細川両家記』の書誌学的検討を進展させることが可能となった。

④勉強会：（1）テーマ：『細川両家記』の書誌学的検討。（2）講師：瀬戸祐規氏。（3）会場：大阪市立大学文化交流センター

2. 継続調査

昨年度未検討の諸写本の調査：彰考館本，加賀市立図書館蔵聖藩文庫本，尊経閣文庫本，神功文庫本。各機関と連絡し，写本コピーを作成し，受領した。これまで作業してきた諸写本との校合作業を，メンバーで分担して行った。

3. 成果報告

調査・検討作業を終えたのち，出来るだけ早いうちに，テキスト情報，研究の過程で得られた新事実，研究論文などを含んだ報告書として刊行するため，科学研究費刊行助成金の申請を行う。

5. 早川美晶「モルドヴァ地方の教会堂壁画，通称〈コンスタンティノープル包囲〉（16 世紀）の研究」

2009 年 9 月 18 日から同年 10 月 13 日にかけてルーマニアに滞在し，モルドヴァ地方で 16 世紀に教会堂の外壁に描かれた，通称〈コンスタンティノープル包囲〉の調査のため，10 月 5 日から 10 月 8 日にかけてフモール修道院・生神女就寝聖堂，モルドヴィッツァ修道院・生神女福音聖堂，アルボレ教会・洗礼者イオアン斬首聖堂，プロボタ修道院・聖ニコラエ聖堂，スチャヴァの新イオアン（Sfantul Ioan cel nou de la Suceava）修道院・聖ゲオルゲ聖堂の 5 つの教会堂を訪れた。また，先行研究等の文献調査をブカレストにある国立アカデミー所属，G. オプレスク芸術史研究所にて行った。教会堂の調査にあたってはルーマニア・ユネスコ協会クラブ連盟会長ダニエラ・ポペスク氏およびスチャヴァ・シュテファン大公大学電気工学部準教授ダン・ミリチ氏らの協力を得た。また G. オプレスク芸術史研究所においては，エカテリーナ・ブクレイ氏，コンスタンツァ・コステア氏およびマリナ・サバドス氏らからルーマニアのポスト・ビザンティン美術に関する情報を頂戴した。

通称〈コンスタンティノープル包囲〉は，〈アカティ

ストス聖母讃歌〉という大きな主題を構成するモチーフである。〈アカティストス聖母讃歌〉自体は東方正教会圏で広範囲の地域や時代にわたって見られる画像であるものの，この通称〈コンスタンティノープル包囲〉は16 世紀モルドヴァの作品にのみ出現する。さらにポスト・ビザンティン美術において教会堂壁画に都市コンスタンティノープルが描かれた希な事例でもあることから，モルドヴァにおけるポスト・ビザンティン美術の代表作として学界のみならず観光素材としても知られている。しかしこのモチーフは本来 626 年のコンスタンティノープル防衛事件を描いたものであることが先行研究で判明しているにもかかわらず，それとは別の出来事である 1453 年のコンスタンティノープル陥落を表す画像であるかのごとく様々な場面で写真資料が用いられる現状がある。早川が本プロジェクトを経て最終的に目指すのは，画像が本来与えられたコンテキストとは別の役割を担わされる過程を追うことであるが，そのためにはまず当該画像について詳細なデータを得る必要があり，何が描かれているかといった画像の詳述はもちろんのこと，当該画像が描かれる教会堂の外壁全体を見渡し，〈アカティストス聖母讃歌〉をはじめとして，教会堂の壁面に一緒に描かれる他の主題の画像との位置関係を把握する必要があった。当該画像はモルドヴィッツァ修道院とフモール修道院の作例が有名であるが，流通する写真資料の多くはモルドヴィッツァ修道院の作例で，かつ包囲されるコンスタンティノープルのみを写した部分写真である。

本プロジェクト遂行により，以前よりその存在を写真資料で確認できていたモルドヴィッツァ，フモール，アルボレの各教会堂における作例に加え，新たにプロボタ，スチャヴァの新イオアンという 2 つの作例の写真資料を得ることができ，この 5 つの作例に関する画像分析は前進した。しかし通称〈コンスタンティノープル包囲〉はこの 5 つ以外にも作例があることが先行研究にて言及されており，その存在場所の詳細に関する情報は文献により異なり，またそれらの文献に常に写真資料が添えられているわけでもないため，本プロジェクトでもって画像の確認をし終えたと言うことはできない。通称〈コンスタンティノープル包囲〉の作例データ，特に写真資料の収集は今後も継続する課題である。

なおこのルーマニア滞在では上記の 5 つの教会堂を含めて合計で 20 の教会堂を調査した。そのうちモルドヴィッツァとアルボレを含む 8 つの教会堂に描かれたモチーフ〈関所〉に関する研究報告を 2010 年度『鹿島美術研究（年報 27 号別冊）』に掲載した。

6. 小林聡明「GHQ 占領期大阪における在日朝鮮人メディアの歴史社会学的研究」

2009 年度は，在日朝鮮人メディア研究のうち，雑誌に焦点をあてた分析を行った。さらに時代を朝鮮戦争期から 60 年代末まで広げるとともに，分析対象とするメディアをラジオまで拡張した。これら研究成果は口頭発表や論文を通じて，国内外で発表し，特に韓国の研究者と積極的に交流をはかった。発表した成果は，次の通りである。

・雑誌論文

①「冷戦期アジアの「電波戦争」研究序説―朝鮮戦争休戦後の VUNC（国連軍総司令部放送）に注目して―」『応用社会学研究』No. 52，立教大学社会学部，2010 年 3 月

②「GHQ 占領期における在日朝鮮人雑誌の書誌的研究」『人文学研究所報』No. 43，神奈川大学人文学研究所，2010 年 3 月

③「東アジア・メディア史研究の可能性－日韓の相互理解と東アジアの和解にむけて」『都市文化研究』Vol. 12，大阪市立大学大学院文学研究科，2010 年 3 月

④「韓国外交文書が暴く「核密約」の真相」『中央公論』2010 年 2 月号，中央公論新社

⑤「帝国日本の対外広報宣伝活動―カーネギー財団主催米国記者団東洋視察に焦点をあてて」『日本学研究』第 29 集，檀国大学日本学研究所，2010 年 1 月（韓国語）

⑥「韓国外交史料館所蔵中国・台湾関連文書の紹介」『近きに在りて』第 56 号，2009 年 11 月

⑦「VOA 施設移転をめぐる韓米交渉－1972～73 年」『マス・コミュニケーション研究』日本マス・コミュニケーション学会，第 75 号，2009 年 7 月

・主な口頭報告

①「1940 年代後半における日韓間の人の移動と米軍による監視」『歴史の視角から見る“東アジア世界”のアイデンティティと多様性」東アジア研究フォーラム，東北アジア歴史財団，ソウル，2009 年 11 月 5-6 日

②*“Coming Home, Smuggling, Repatriating: Korean Border-Crossing and Media during the US Occupations of Southern Korea and Japan, 1945-1948”*, Second International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia, 22-23 October 2009, Vietnam Academy of Social Sciences, Hanoi, Vietnam

③*"Korean Border-Crossing and the Media during the US Occupations of Southern Korea and Japan, 1945-1948"*, 国際発信力育成インターナショナルスクール，大阪市立大学大学院文学研究科，文部科学省大学院教育改革支援プログラム，2009 年 9 月 15 日

④「帝国日本の広報文化政策と植民地朝鮮，そしてメディア」国際シンポジウム，檀国大学現代日本学研究所，

2009年9月25日（韓国語）

⑤「東アジア・メディア史研究の可能性－一国史の克服と東アジアの和解」日韓合同セミナー『プロパガンダ研究の新潮流』ソウル大学言論情報学科BK21プログラム，2009年8月3日（韓国語）

7. 西尾泰広「ダニエル・ボツマン著 “Punishment and Power in the Making of Modern Japan”（Princeton UP）を精読し書評する日本近世史・近代史合同研究会」

本プロジェクトは，ダニエル・ボツマン氏（米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校・歴史学部准教授）の著書 “Punishment and Power in the Making of Modern Japan”（Princeton UP, 2005）の精読を通じて，日本近世・近代史研究の課題や方法を考えようとしたものである。同書は，日本近世・近代の刑罰制度を一貫した展望のもとで検証した点に特徴がある（内容は『都市文化研究』第12号掲載の「中間報告」を参照されたい）。

本プロジェクトでは，11名の研究協力者（うち2名はドクター研究員，7名は大阪市立大学大学院文学研究科院生）の参加・協力を得て，邦訳版刊行（邦題『血塗られた慈悲，笞打つ帝国』インターシフト，2009年10月）に先立って原書での精読に挑み，2009年7月の著者の来日予定に合わせて「近世・近代史合同書評ラウンドテーブル」形式での書評会を開催することにした。

合同書評ラウンドテーブルにむけて，原書読解の節目としての準備会を2回開催した（2009年6月24日，7月2日，会場は大阪市立大学）。**準備会Ⅰ**（6月24日）では，斉藤紘子氏が「序章の内容・論点整理」を報告し，著者の理論的な枠組みと本書の構成を大づかみに理解した。そして各章の報告担当者（後記）を決めて，合同書評ラウンドテーブルの準備報告会として，**準備会Ⅱ**（7月2日）を開催した。

こうした準備をふまえて，著者を招いての**合同書評ラウンドテーブル**を2009年7月12日に開催した（於：大阪市立大学文学部会議室）。当日は，研究協力者や他大学の院生など17名の参加者をえた。ラウンドテーブルでは，以下のような研究代表者・協力者などでの分担により，各章の内容と論点について報告がなされた。序章・終章－斉藤紘子氏，第1・2章－久角健二氏，第3章－岡本一也氏，第4章－山下聡一氏，第5章－藤井正太氏，第6章－羽田真也氏，第7章－西尾泰広。報告を承けて著者のリプライがなされた後，同書全体について，研究協力者のジョン・ポーター氏と本プロジェクトの指導教員塚田孝氏がコメントした。両氏のコメントも承け，最後に同書全体に関する討論を行った。

討論では，次のような理解を共有することができた。本書では，日本近世から近代への移行を検討するにあたり，「刑罰」（および近世の牢屋から近代の監獄への転換）の問題に焦点がおかれている。ボツマン氏は，日本の近世社会を近代社会とは異質な「身分制社会」として捉え，身分制の論理に相即的な近世の刑罰・牢獄・人足寄場の構造に着目することで，明治期の刑罰の淵源を，近世の政策にではなく欧米列強（帝国主義）との出会いのなかに位置づけている。その指摘によって，近世社会を身分制社会として把握することの意義を改めて自覚することができた。また，刑罰の「近代化」をどう捉えるかという点にも画期的な指摘があった。それは，フーコーの「近代監獄（一目洞視の権力）の誕生」という周知の（かつ普遍的な）枠組みだけでなく，帝国主義・植民地支配を正当化し補強してきた「歴史主義 historicism」理論の問題性を踏まえることで，制度そのものの展開と日本を含むアジアの「近代化」の特質・矛盾をより深いレベルから叙述したことである。近代の日本において刑罰が果たした役割と，アジアにおける日本の帝国主義侵略政策の関係を考える上でも，重要な提起として受け止める必要がある。

個々の研究組織参加者にとって容易ではない原書での講読という形ではあったが，近世史・近代史専攻の研究協力者が組織全体として精読に取り組み，さらに著者本人の出席をえた合同書評ラウンドテーブルを開催したことによって，以上のように理解が深まった。こうした成果は，日本近世・近代史研究に取り組んでいる本プロジェクトの研究組織参加者それぞれの今後の研究に活かされていくことであろう。

8. 根来麻子「歌謡史の構築および早歌の研究」

(1) プロジェクトの概要

日本文学史上，歌謡は和歌とともに大きな位置を占めてきたが，和歌に比べて研究が手薄であり，近隣分野の研究者の関心も薄いといわざるを得ない。そこで本プロジェクトでは，歌謡に関する知識習得を計り，そこで得た知見を各自の研究に反映させることを目指す。プロジェクト推進の手段として，定期的に研究会を行った。研究会は基本的に，「『日本の歌謡』（双文社出版，1995年）輪読」と「『宴曲集』輪読」の二部体制を目指した。

(2) 研究会報告

第1回研究会　2009年4月29日　於；大阪市立大学文学部

第一部（『日本の歌謡』を読む）　発表者：田中寛子，「歌謡研究の方法」

第二部（『宴曲集』輪読）　発表者：大坪亮介，「『宴曲集』下「霊鼠誉」」

第一部では，歌謡史を通観するためのイントロダクションとして，田中寛子氏が「歌謡とは何か・どういった研

究方法が可能か」などについて，研究史と今後の課題について概説した。第二部では，大坪亮介氏が，軍記物研究の立場から歌謡「霊鼠誉」の表現について詳細な注釈を行い，典拠のいくつかが明らかにされた。

第 2 回研究会　2009 年 5 月 31 日　於；大阪市立大学文学部

第一部（『日本の歌謡』を読む）　発表者：根来麻子，「『続日本紀』歌謡」

第二部（『宴曲集』輪読）　発表者：岡崎智美，「『宴曲集』巻第五「心」」

第一部は，根来麻子が発表を担当した。『続日本紀』歌謡についてのテキスト該当部分を概説したあと，個別の歌謡を取り上げ注釈を試み，和歌表現には例を見ない表現が用いられていることを指摘した。第二部では，岡崎智美氏が歌謡「心」について輪読を行った。表現の典拠が，和歌のみならず，同時代の軍記物や平安時代の物語にも求められることが分かり，作者層に対しても議論が及んだ。

(3) プロジェクトの成果

歌謡と和歌とがどのように相関するのかを見定めるため，現在までの和歌史を立体的に再構築することを目指して研究会を行った結果，これまで特に注視することのなかった歌謡史を概観することができ，和歌史を相対化する視点を獲得することができた。また，先行研究の少ない『宴曲集』という歌謡集を緻密に注釈することで，歌謡の典拠が解明され，そこから，歌謡の担い手や披講の「場」にまで肉薄することができた。韻文専門の院生と中世文学（散文）専門の院生双方から意見が提出され，有意義な議論を行うことができた。

9. 中嶋晋平「戦間期における地方紙の軍に関する報道と世論形成 ―『京都日出新聞』の軍縮報道を事例に―」

1. 研究の概要

本研究は，1920 年代のいわゆる反軍国主義の時代から，満州事変以降の軍国主義の時代へと急速に移り変わっていくなかで，当時最大のマスメディアであった新聞が民衆の軍に対する世論形成においてどのような役割を果したのかを，主に地方紙の軍縮に関する報道に注目することで明らかにすることを目的とする。具体的な作業としては，さまざまな地域で民衆の世論形成を担った各地の地方紙の軍に関する報道について分析を行う。

2. 史料調査

本研究の中心となる史料は，軍縮が地域の政治・経済に大きな影響を与えたと考えられる京都で発行されていた『京都日出新聞』である。本プロジェクトにおいては，1930 年を中心に集中的に史料調査および収集を行った。またそれと並行して，『京都日出新聞』の報道の特徴を比較することを目的に，『大阪朝日新聞』やさまざまな地域の地方紙についても史料収集を行った。

（調査内容）

国立国会図書館関西館において，『京都日出新聞』および他の地方紙の記事を随時収集。

主に 1930 年を中心に，①ロンドン海軍軍縮会議および統帥権干犯問題，②国防思想普及運動，③第 16 師団（京都が衛戍地）の満州駐剳に関する記事を収集。

3. 成果と課題

本研究によって，これまで通説的に語られてきた 1920 年代における「軍縮世論」（あるいは「軍縮輿論」）が，実際には有力新聞の主張を，そのまま「世論」（あるいは「輿論」）と解釈してきた側面があることが明らかとなった。このことから，当時の「軍縮世論」（あるいは「軍縮輿論」）の把握とその形成に果したマスメディアの役割を考察するためには，軍と地域社会とのかかわりといった「地域性」という視点から，事例分析を積み重ねる必要があることがわかった。またこのことは，軍縮以外の他の軍に関する報道全般についても当てはまる。

以上の点から，今後は軍縮以外の事例についても，各地方紙の報道の特徴や相違点について事例研究を積み重ね，それによって当時の軍に関する世論（あるいは輿論）の実態に迫ることができる。

4. 成果公表

現在も資料収集・分析中であり，それらが一定程度完了次第，学会発表等を行う予定である。

10. 足立匡敏「近代短歌の発生と展開についての研究 ―佐佐木信綱における短歌革新の解明をとおして―」

近代短歌の形成期に刊行された佐佐木信綱の第一歌集『思草』（明治 36 年刊）を考察対象とし，信綱がどのような作品を選び取り，この歌集を編纂したかの検証を行うため，以下の調査を実施し，主に第一歌集刊行までの信綱の作品を網羅的に収集することに努めた。

①2009 年 8 月 8 日，17 日。大阪府立大学学術情報センター図書館

内容：雑誌『帝國文学』（1 巻 1 号〈明治 28 年 1 月〉～10 巻 7 号〈明治 37 年 7 月〉）の調査

成果：信綱の短歌を多数確認

②2009 年 9 月 1 日～11 日。大阪市立大学学術情報総合センター

内容：雑誌『心の花』（1 巻 1 号〈明治 31 年 2 月〉～8 巻 9 号〈明治 37 年 9 月〉）の調査

成果：信綱の短歌，評論文，随筆などを多数確認

③2009 年 11 月 10 日～14 日。大阪府立大学学術情報センター図書館

『女学雑誌』（第 1 号〈明治 18 年 7 月〉～第 524 号〈明

治 37 年 2 月〉）の調査

成果：信綱の短歌，評論文，随筆などを多数確認

このほかにも，随時，大阪府立中央図書館，関西大学附属図書館などで，『筆の花』『めさまし草』『幼学生』『文藝倶楽部』『太陽』などの文学雑誌等に掲載されている信綱の詩歌を調査し，合計 1500 作以上の詩や短歌を確認した。また確認した作品本文は，すべてエクセルファイルに入力し，データベース化した。

以上の調査を踏まえ，作品の分析を進めた結果，(1)『思草』所収の短歌が，当初作品がつくられた場・文脈から切り離されて，配列されていること，(2) 信綱の特徴として，貧富の差，労働問題など社会的なテーマに関心を寄せて作品が多いことなどが分かった。

今後さらに調査・考察を進め，『思草』の編纂過程や信綱の短歌革新の内実について論文化する予定である。

2010 年度ドクター研究員プロジェクト中間報告

1. 牧飛鳥「日本古代の墓誌の再検討」

本プロジェクトは，奈良時代の日本で埋納され，出土して現在まで伝わっている墓誌について，文字のみならず出土地も対象として検討することを目的としている。

日本古代の墓誌は，現在までに知られているのは 16 例のみで，その一定の研究成果は『日本古代の墓誌』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編，1979 年，同朋社）にまとめられている。現在では墓誌を研究の中心にすえるものはごく少数となっている。

これら日本の墓誌の源流とされるのは中国であるが，その事例数・形状・材質・記述方法・普及等に違いが多く，日本への流入経路や作成目的にはまだ検討の余地がある。また，墓誌に触れる研究では，多くの場合その記述内容のみを扱い，出土地への言及は少ない。16 例中 13 例が畿内で出土しており，都市近郊の墓制の一形態とみなせるが，埋納当時の該当地域を含んだ研究は十分とはいえず，出土地を現地調査とともに再検討することにより，それらの問題点の解決に寄与できると考える。

出土地の現状観察は，遺跡の現状確認であり，文化財の今後をどのように考えるかという研究代表者の今年度の研究テーマとも合致する。

調査の具体内容は，現地見学会を 2 回行い，研究会を 1 回開催する。見学地は，石川年足墓（大阪府高槻市）と小野毛人墓（京都府京都市）を予定している。研究会では，研究協力者の稲田奈津子・遠藤慶太・小倉久美子の 3 氏を講師として招き，それぞれの報告と討論を行う。

現地調査は 2010 年 11 月 23 日に石川年足墓，12 月 12 日に小野毛人墓について行い，研究会は 2011 年 1 月 29 日に大阪市立大学での開催を予定している。

研究会ではテーマを「日本古代の墓誌の再検討」とし，報告題目は以下のとおり（いずれも仮題）となっている。

稲田奈津子「墓誌の形態と系譜」，遠藤慶太「写経識語と墓誌について―出典研究から―」，小倉久美子「平安時代における死者の顕彰―墓誌の衰退を起点として―」，牧飛鳥「墓誌と墓誌出土地の現状」

調査と研究会の調査報告を『都市文化研究』，または『市大日本史』に投稿し，成果を発表することを予定している。

2. 羽田真也「日本近世における流通と地域社会についての研究 ―近世大坂を中心に―」

本プロジェクトでは，日本近世における江戸や大坂の干鰯流通研究をすすめている原直史氏（新潟大学）の業績検討を行い，氏を招いて研究会「日本近世における流通と地域社会」を開催する。これらを通じて，流通史研究の研究視角や分析手法・現在の到達点を学び，参加者各人が今後の研究に生かしていくことを目指している。

この間，原氏と相談の上，研究会の日程を 2011 年 1 月 9 日（日）と決定した。研究会では，研究協力者が中心となって原氏の研究業績のまとめ，各人の問題関心や研究と結びつけた質疑を行い，原氏にリプライしていただく予定にしている。

これまでに準備会を 2 回実施した。9 月上旬に，第 1 回目として，原氏の問題関心がうかがえる総論的位置にある「地域と流通」（同『日本近世の地域と流通』山川出版社，1996 年の序章）および「流通史研究の新展開」（『歴史評論』564 号，1997 年）を取り上げて書評会を行った（参加者 10 人）。三田智子氏（D 研究員）が報告を行い，原氏の研究論文の全体を把握するとともに，研究や問題関心について議論をおこなった。とくに，房総半島の村々から百姓の駄賃稼ぎによって干鰯が江戸へ運ばれる過程を研究されていた 80 年代後半から，90 年代以降江戸の干鰯問屋仲間や市場の構造分析研究へと展開していく点に注目した。これらは，都市史研究や身分制研究の進展によって，売りの形態や市場社会の解明が要請されたこと，また町人と商人の本源的な差違が理論的に示されたことを背景として，問屋・仲買・小売の本源的所有に着目することで可能になった展開であるとの理解に達した。

第 2 回の準備会は，10 月 20 日におこない，同「市

場と問屋・仲買－江戸・東浦賀・大坂の干鰯市場を中心に－」（斎藤善之編『新しい近世史③市場と民間社会』，1996 年）の書評会を行った。9 人が参加し，とくに報告者はたてずに議論を行った。本論文は，原氏がそれまで行ってきた江戸を中心とする干鰯研究の総括であり，また大坂靱の干鰯市場に関する最初の研究でもある。本論は，本源的所有の解明を通じて，江戸・東浦賀・大坂の干鰯問屋や市場のあり方の差違を説明するという問屋論・市場論において画期的なものであるとの理解に達した。

今後も準備会を継続して行い，原氏の著作のうちでもとくに大坂靱の干鰯市場関係論文を 2010 年 11 月 17 日（水）と 12 月 1 日（水）にとりあげる予定である。また 12 月 22 日（水）には，報告者が当日にむけた発表を行うとともに，事務的な相談をすることにしている。

3. 古野貢「戦国期畿内都市史のための軍記史料『細川両家記』の有用性の研究 ―歴史学・考古学・国文学による学際的アプローチによる―」

研究協力者：村井良介（神戸大学特命助教），藤本史子（大手前大学非常勤講師），藤本誉博（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院生），石本倫子（関西大学なにわ大阪文化遺産学研究センター研究員））

1. プロジェクトの目的，予想される成果

①目的：昨年度プロジェクトの成果をふまえ，戦国期畿内都市史研究進展のために，『細川両家記』のテキストとしての評価（著者の立場・地位，認識，情報への接し方・処理の方法など）や，叙述の相対化についての，さらなる精密な分析を継続している。(1) 昨年度分析した写本に加え，さらに未検討の諸写本をあわせて校合することで，『細川両家記』の最も古態に近い記述を探るとともに，他の軍記史料との系譜関係などから，同史料の成立を検討する。(2) 一次史料・考古学的成果との比較による分析により，『細川両家記』の位置づけ，著者生嶋宗竹の視点の明確化，都市を拠点とした諸権力の権力構造，畿内都市史の再検討を行う。

②作業：(1)『細川両家記』の諸写本間の表現方法や用語の差異の確認のため，昨年度未検討の諸写本（彰考館本，加賀市立図書館蔵聖藩文庫本，尊経閣文庫本，神宮文庫本）をメンバーで分担して校合作業，および史料批判を行っている。(2) 諸写本の系譜関係，成立年代の近い他の軍記史料との関係について，国文学の研究手法・成果を学ぶため，同分野における戦国期畿内軍記史料の研究者を講師として招き，2 回程度の勉強会を行う予定（校合作業が進展する年内を目処に開催する予定）。

③予想される成果：(1) 昨年度の成果と合わせ，より精密な『細川両家記』諸本の類型・系譜を明らかにできる情報を得ることが可能となる。(2) 歴史学的なテキスト解釈・理解にとどまらず，国文学的な解釈・理解の方法を得ることで，『細川両家記』の書誌学的検討を進展させることが可能となる。

④勉強会（予定）：(1) テーマ：『細川両家記』の書誌学的検討。(2) 講師：鶴崎裕雄氏，瀬戸祐規氏。(3) 会場：大阪市立大学文化交流センター

2. 調査

昨年度未検討の諸写本（彰考館本，加賀市立図書館蔵聖藩文庫本，尊経閣文庫本，神宮文庫本）の調査を行い，写本コピーを作成した。諸写本との校合作業を実施中。

3. 成果報告

調査・検討作業を終えたのち，出来るだけ早いうちに，テキスト情報，研究の過程で得られた新事実，研究論文などを含んだ報告書の刊行を目指す。現在出版社と内容や出版時期などについて交渉中。

4. 補足

当初より研究会メンバーであった藤本誉博（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）氏が，就職のため実質的な作業からははずれている（2010 年 9 月～）。

4. 桑島穏「イギリス帝国における植民地教育政策の系譜 ―両大戦間期・英領ゴールド・コースト植民地での教育政策の位置づけ―」

研究報告

1）桑島穏「両大戦間期のイギリス領ゴールド・コースト植民地における学校教育制度と教育カリキュラム―「帝国」・「植民地」・「原住民」を巡って―」，第 7 回アフリカ史研究会，於関西大学，2010 年 7 月。

2）Yasuki Kuwajima, “The education reform and some colonial elites in the British Gold Coast Colony during the 1920s: The meaning of ‘collaborators’ under colonial orders”, in the *1st Finnish-Japanese workshop for doctoral students in history and economics, publishing your research abroad: possibilities and challenges*, University of Jyväskylä, Finland, September 2010.

論文・その他

3）桑島穏，小林和夫「〈書評論文〉イギリス帝国から世界システムへ―John Darwin, The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System 1830-1970, Cambridge, 2009 をめぐって―」（雑誌『パブリック・ヒストリー』に投稿中）

4）本研究プロジェクトの成果（の一部）は，留学中に執筆する学位論文の一部として結実する予定である。

現状と予想される成果

研究代表者は現在，特に①両大戦間期のイギリス領ゴールド・コースト植民地で実施された教育政策，②同植民地で活動していた現地民エリート層・学校教師と教育政策との関係性，を調査している。2010 年 10 月よりイギリス・バーミンガム大学大学院に留学しながら，同大学所蔵の資料（当該時期に同植民地で発行された政府公文書，現地エリート学校の新聞，など）を調査する機会を得ている。さらに，③政治学研究において発展した「植民地国家」論を読解している。特にアフリカの事例を論じた Crawford Young, *The African Colonial State in Comparative Perspective*, Yale University Press, 1994 を，歴史的な実態（前述①②）に即して，批判的に援用することが目的である。

以上の調査を通じて，植民地において準国家的とも言える権力秩序がまさしく成立しようとしていた過渡期において，現地エリート層がその権力秩序の構築にいかなる役割を担っていたのか，をより実証的に考察することができると考えられる。その際には，植民地政府当局からの視点だけでなく現地エリート層側，そして一般住民側の視点に配慮することで，「植民地国家」における包括的な支配・関係の構造が明らかとなるだろう。

5. 松井広志「多層化する＜監視＞と現代社会 ―グローバル化／都市空間／メディア―」

本プロジェクトは，近年諸領域で関心を高める「監視社会化」についての知見を発表・総合することを目的として，「多層化する＜監視＞と現代社会」（“Surveillance” to be multi-layer in Contemporary Society）という題目の研究会（略称・＜SiCS＞）を開催した。

グローバル化と情報技術の発展という大きな社会的変化なかで，近年，社会学やカルチュラル・スタディーズをはじめとする領域で，＜監視＞（surveillance）をキーワードとした研究が盛んである。このような監視研究は，増大する社会的リスクに対処するセキュリティ意識の高まりから要請されたものであるが，その結果として社会的分類化と新たな排除をもたらすことが懸念されている。

しかし，現代の監視状況を捉えるのは容易ではない。それは監視が，①9.11 以後のグローバルな監視社会化の流れ（マクロレベル）や，②地域や具体的な都市空間での監視の実践（ミクロレベル）といった諸相だけでなく，③それらの動きを媒介するメディアとの関わり（メディアレベル）といった多様な位相で進行しているためである。したがって，このような重層的な監視をめぐる現代社会の状況を総合的に理解するためには，監視の諸研究の実証的分析を深めつつ，それらを架橋させ，理論化していく作業が不可欠である。

以上のような問題意識から，さまざまな位相の監視についての研究を発表・共有する場として本研究会を開催することとした。

現在のところ計 2 回開催しており，日程および招聘した講師と報告題目は以下のとおりである。場所はいずれも，大阪市立大学文化交流センター・小セミナー室を利用した。

▼第 1 回：2010 年 7 月 31 日　鈴木謙介（関西学院大学准教授）「監視社会と自由のシステム　創造性／自発性／祝祭」

▼第 2 回：2010 年 8 月 25 日　柏原全孝（追手門学院大学准教授）「監視と（脱）欲望」

研究会の参加人数は 2 回とも 10 人弱であり，けっして多くはないものの，当該分野の専門家や隣接領域の研究者も複数人参加しており，議論は従来の「監視社会論」の専門性を超えた領域横断的なものとなった。そのため，現代社会において＜監視＞とは何かについての考察を深めることにつながった。

研究会の詳細な成果に関しては，研究会での報告内容およびそこでの議論の成果をまとめたものを，『都市文化研究』あるいは『市大社会学』に投稿する予定である。

6. 竹内幸絵「旧「萬年社」所蔵資料と出版物の調査に基づいた関西の広告史研究」

1. プロジェクト概要

「萬年社」は 1890 年（明治 23）に高木貞衛が大阪で創業した電通・博報堂よりも古い歴史を持った広告代理店である。百年余りの繁栄の後 1999 年に倒産し歴史を閉じた。本研究は，広告が近代的な産業として成立していく過程において重要な足跡を多く残した「萬年社」の活動に着目した大阪の広告史研究である。研究のアプローチには同社倒産時所有資料と，同社の出版事業調査があるが，本年度は主に萬年社が戦前から発刊していた多数の広告研究書，雑誌の調査を研究協力者と共に実施し，その成果報告を行う研究会を開催する。

2. 研究会報告

①第 1 回研究会　　2010 年 5 月 1 日　於：関西学院大学大阪梅田キャンパス

「萬年社戦前発刊誌研究」第 1 回として 2 名が報告。

津金澤聡廣（関西学院大学名誉教授）『広告論叢』第七集（1927 年）より「霜鳥正三郎（京都高等工芸学校教授）論『広告美術の考察』」を中心に，竹内幸絵『広告論叢』第二十九集（1940 年）より「萬年社創業五十周年記念号の編集にみる戦前期の萬年社」

津金澤からは，関西を基点とした雑誌『プレスアルト』における霜鳥の立場と，萬年社での論考についての考察が報告された。竹内からは，同記念号の中で萬年社社員記載の日本の広告史を概観した論文をとりあげ，1940 年時点で認識されていた関西の広告史につ

いて報告を行った。

②第 2 回研究会　2010 年 7 月 16 日　於：アド・ミュージアム東京（汐留），同館収蔵庫（浜松町），早稲田大学

広告資料保存の先駆事例見学，情報交換，研究会

1）アド・ミュージアム東京広告資料展示見学と館長坂口氏への資料内容のヒアリング，アーカイブスでの広告資料調査。

2）同館収蔵庫での資料保存方法のヒアリング，資料現物確認。研究情報の相互交換。

3）研究会（於：早稲田大学）

①報告者 1：井上祐子（立命館大学）「初期『広告年鑑』にみる萬年社の事業活動の意義－『広告論叢』研究の手がかりに」。今後の萬年社研究の方向性検討のために『広告論叢』の分類案が提示された。

②報告者 2：白山真理（日本カメラ博物館運営委員）「1940 年代の写真雑誌の統廃合」。戦時期の国家の圧力で統廃合されていった個人むけ写真雑誌について報告された。

3. プロジェクトの予想される成果

萬年社が発刊した，日本で最も早い広告業界の現況レポート『広告年鑑』（1922 年－1969 年）と，学術的・実務的・デザイン的等様々な角度から広告を検討した論集『広告論叢』（1923 年－1971 年）の先駆性，重要性は広く知られるが，ぼう大な出版は散逸しており活動の整理は手付かずで研究事例もない。本研究にて行う同社の出版物の内容把握と，それを基に共同で行う同社の広告活動の実態解明が，今後の大阪の広告史研究のための基礎情報となることを期待している。

7. 田原憲和「ルクセンブルク語コイネー研究会」

本プロジェクトでは，研究会の開催と報告書として論文集を出版する計画である。研究会は既に開催済みであり，論文集も 12 月完成に向け準備が進められている。以下，それぞれの内容についての概要を説明する。

研究会について（ルクセンブルク語コイネー研究会）

2010 年 9 月 8 日（水）　大阪市立大学文化交流センター

報告 1：田原憲和（UCRC ドクター研究員）「ディックスと体育協会」

報告 2：小川敦（招待講師：一橋大学）「言語イデオロギーの対立から考える国民意識―1984 年言語法前のルクセンブルク―」

報告 3：田村建一（愛知教育大学）「The Dialect of Wiltz in a Luxemburgish Drama for Children: With the Sample Text of “Den Zauberer vun Oz”（2005）

報告 4：齊藤公輔（UCRC ドクター研究員）「集合的記憶と文学受容―メディアの発達を中心に―」

今回，「文化と記憶」というテーマのもとで 4 人が報告を行った。それぞれの報告の内容は，「歴史と文化を通じ共通の記憶を創出する作業について」（田原），「単一文化性と多文化性の対立について」（小川），「方言劇における言語と文化のずれについて」（田村），「近代の文学受容における集合的記憶の役割について」（齊藤）であり，一般的な理論研究から具体的な事例報告まで多岐にわたった。それぞれの報告後にディスカッションが行われたが，議論の大半は「記憶」についてのものであった。議論を通じ，報告者ならびに参加者の間で，「記憶」という概念を導入することにより「文化」ないしは「（国民）意識」といったおぼろげで抽象的なものをより直感的に認識することが可能となるが，これを理論的に説明する際には注意が必要であるという認識を共有することができた。

論文集について

タイトル：「ルクセンブルク学研究」（Studia Luxemburgensia）1 号，ルクセンブルク語コイネー研究会会報

掲載論文：「思想としてのルクセンブルク語」（田原憲和），「ルクセンブルクにおける言語イデオロギーと国民意識―1970 年代から 1984 年言語法以前に関する考察―」（小川敦），「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」（田村建一）

ルクセンブルク語コイネー研究会プロジェクトにおける研究報告をもとにした 3 篇の論文から成る論文集「ルクセンブルク学研究」を 2010 年 12 月に出版する。ルクセンブルク学をテーマにした論文集が出版されるのは国内では初めてのことであり，大変意義深いものである。今後，この分野の研究の裾野を広げる意味でも非常に重要なものとなると思われる。

8. 野田はるか「ポストモダンの身体表現と重力の意味作用に関する研究」

研究会・調査等

（1）コーポリアル・マイムと舞踏の比較研究に関する調査

（第 1 回）2010 年 5 月 20 日（木），（第 2 回）2010 年 5 月 27 日（木）　場所：慶応義塾大学アートセンター内土方巽アーカイヴ

□内容：表現技法に重力への意識を取り入れたパフォーマンス例として，舞踏家・土方巽の『疱瘡譚』（1972 年初演，新宿文化センター）をとりあげ，その映像資料や当時の批評等を調査する。

□調査成果：『疱瘡譚』に関する文献資料等の閲覧，文献複写・購入，アーカイヴ所蔵の映像資料の視聴，小菅隼人教授（慶応義塾大学）ならびに森下隆氏（慶応義塾大学アートセンター訪問研究員）へのインタビュー（土方巽に関する学術的研究の現状，土

方とマイムとの関連性について等），

（2）コーポリアル・マイム研究会（仮）

□（第 1 回）2010 年 10 月 25 日（月）18 時～ （第 2 回以降の開催日時，場所等は調整中）

□参加予定者：古田敦子氏（いいむろなおきマイム・カンパニー），田中秀彦氏（いいむろなおきマイム・カンパニー，iroNic ediHt DESIGN ORCHESTRA），金世一（東京大学大学院後期博士課程，俳優，演出家，通訳），野田はるか（大阪市立大学大学院 後期博士課程）

□内容（期待される成果）；学術的研究対象としてのコーポリアル・マイムの可能性，他の身体表現との比較，また日本でコーポリアル・マイムを上演するにあたっての問題点など，実践家・研究者双方の立場から検証，意見交換や議論等をおこなう。

2. 成果報告等

（1）国際学会にて成果発表

□国際演劇学会（International Federation of Theatre Research World Congress 2010）
New Scholars Forum にて発表，“Butoh and Corporeal Mime: Alternative Thoughts on Modern Body”，2010 年 7 月 28 日（木）13:00～14:00，会場：Ludwig-Maximilians-University（ミュンヘン大学）

（2）研究会等にて成果発表（予定）

インターナショナルスクール院生セミナー「アートの転換期」にて発表予定，“Physical Restraint in Performances: Corporeal Mime and Butoh”，2010 年 10 月 29 日（金）14:00～17:00，大阪市立大学高原記念館学友ホール

9. 佐藤量「上海租界をめぐる中国人学生の国際移動に関する研究 ―旧大阪商科大学を事例に―」

本プロジェクトは，中国人学生が，租界と日本の学校ネットワークを経由して移動する過程を追うことで，租界と日本がつながってゆく様相を明らかにすることを目的とする。

19 世紀から 20 世紀にかけて，イギリス，フランス，アメリカ，日本によって管理された近代上海の租界では，中国人エリート層による近代的な思想や学問，技術を学ぼうとする欲望が高まっていた。租界の学校をめぐって帝国への強い抵抗者が現れる一方で，積極的に近代教育に関わる協力者も少なくなかった。

なかでも，伝統的な中国人社会である「華界」ではなく，欧米列強が管理運営する「租界」の学校に通った中国人は，イギリス，アメリカ，日本へと留学・進学するものが多かった。本研究では，このうち日本への移動に照準をあわせ，とりわけ大阪市立大学の前身である旧大阪商科大学に，商業を学びに来日した中国人学生の国際移動を取り上げる。

本プロジェクトにおける調査内容は，中国上海市档案館と大阪市立大学・大学史資料室における資料調査である。上海市の上海档案館には，およそ 4000 件の戦前教育関係資料が所蔵されており，中国人留学生の国際移動過程を追うことができる。しかし，2010 年 10 月上旬から上海市調査を実施する予定であったが，日中間の不安定な政治情勢を鑑みて上海調査を延期した。現時点では，2011 年 1 月上旬から調査開始を予定している。

一方，大阪市立大学・大学史資料室（学術情報総合センター 6 階）には，創立 100 周年を記念して発刊された『大阪市立大学百年史』の編纂に際して集められた資料が保管されている。これまでの調査で，『大阪市立高等商業学校及び商科大学一覧・要覧』（昭和 4 年～12 年），『商科大学 60 年史』（昭和 19 年），記念アルバム・写真等を閲覧，複写した。

これまでの調査で，戦前の大阪市立大学に留学していた中国人が予想よりも多く，大学側も比較的受け入れ姿勢であることがわかった。大学史資料室にはこのほかにも膨大な資料が保管されているため，引き続き資料調査を継続し，中国人留学生の国際移動を通して戦前の上海と大阪の交流について考察する。なお，本プロジェクトの成果は，マイグレーション研究会編（『タイトル未定』）の単行本の 1 章として，2011 年 3 月に出版予定である。

2010 年度ドクター研究員一覧

	氏　名	指導教員	テーマ
1	オカムラ トシフミ 岡村 俊史	仲原　孝	文化研究のアクチュアリティについての哲学的分析　―都市文化研究の方法論研究として―
2	オグサ ヤスシ 小草 泰	美濃　正	文化的・社会的なものはどのようにして経験によってわれわれに認識されるか
3	タケウチ リョウ 竹内 亮	栄原　永遠男	日本古代都城および周辺地域における寺院の立地と機能の解明
4	タナカ ダイスケ 田中 大介	栄原　永遠男	日本古代都城における市の構造と変遷
5	マキ アスカ 牧 飛鳥	栄原　永遠男	①大阪地域の陵墓等を事例とした文化財の現状についての研究　②古代日本における贈位制および陵戸に関する研究
6	イザキ フミヒコ 伊崎 文彦	塚田　孝	法学者・佐々木惣一の思想史的研究　―戦後の「国体」変更論争を中心に―
7	シマダ カツヒコ 島田 克彦	塚田　孝	近代日本における地域社会構造の歴史的展開に関する研究
8	ニシオ ヤスヒロ 西尾 泰広	塚田　孝	近現代日本における地域社会構造に関する研究　―南王子村・八坂町の19～20世紀―
9	ハダ シンヤ 羽田 真也	塚田　孝	日本近世における農村と都市　―地域社会構造と都市性―
10	ミタ サトコ 三田 智子	塚田　孝	近世畿内かわた村の村落構造と地域社会　―泉州南王子村の19世紀を中心に―
11	ヤマシタ ソウイチ 山下 聡一	塚田　孝	近世都市大阪における塩の流通構造
12	アマノ タダユキ 天野 忠幸	仁木　宏	戦国期における武家の宗教秩序の変容
13	オオムラ タクオ 大村 拓生	仁木　宏	日本中世における大阪湾地域の歴史的展開
14	フジモト タカヒロ 藤本 誉博	仁木　宏	中世都市堺の空間構造の研究　―日本中世の港町の総合的研究を視野に入れて―
15	フルノ ミツギ 古野 貢	仁木　宏	中世後期守護権力による地域拠点の支配についての研究
16	ツジ タカヒロ 辻 高広	井上　徹	清末江西省における都市の公共事業と県行政
17	ナガタ タクジ 永田 拓治	井上　徹	後漢末三国西晋期における基層社会について　―長沙・　郴州出土簡牘をもとに―
18	ハッポウ 八宝	井上　徹	清朝とジェブツンダンバ・ホトクト政治関係の研究
19	ムロヤマ ルミコ 室山 留美子	井上　徹	中国古代都市論の再検討　―出土刻字資料の史料性の考察および居住・葬地を基点として―
20	アナザワ ショウコ 穴沢 彰子	平田　茂樹	小説史料などから見た宋代における都市の人間関係
21	ヤマグチ トモヤ 山口 智哉	平田　茂樹	中国近世の「坊」空間に関する研究　―坊表・牌坊を中心に―
22	キムラ ヨウコ 木村 容子	大黒　俊二	中世後期イタリア都市における説教実践　―説教作成を中心に―
23	クワジマ ヤスキ 桑島 穏	大黒　俊二	両大戦間期の英領ゴールド・コーストにおける歴史教育の開発と都市エリート
24	ズ シ ノブタダ 図師 宣忠	大黒　俊二	中世南フランス都市における文書利用と異端審問
25	ナカヤ ソウ 中谷 惣	大黒　俊二	中世後期イタリア都市における司法の動態的研究
26	マエダ ミツヒロ 前田 充洋	大黒　俊二	第二帝政期ドイツ艦隊建設における海軍とクルップ社の関係　―装甲板価格設定交渉の問題から―
27	ムラカミ モトキ 村上 司樹	大黒　俊二	中世スペイン教会の都市形成力
28	カイバラ アキオ 貝原 哲生	井上　浩一	5～6世紀アレクサンドリアにおける宗教的対立と都市住民への影響
29	ハヤカワ ミアキ 早川 美晶	井上　浩一	モルドヴァ地方の教会堂壁画，通称＜コンスタンティノープル包囲＞（16世紀）の研究
30	ヨネオカ ダイスケ 米岡 大輔	井上　浩一	ハプスブルグ統治期サライェヴォにおける都市行政の実態とその変容
31	ウチタ リュウシ 内田 龍史	谷　富夫	現代大阪におけるマイノリティの若者のアイデンティティと学歴・職業達成に関する実証的研究
32	フ リンリン 傅 琳琳	谷　富夫	中国大都市におけるコミュニティ形成と地域福祉　―大連市の「一般社区」を事例に―
33	タケウチ ユキエ 竹内 幸絵	石田　佐恵子	モダニズム期以降の関西の広告史研究　―萬年社コレクション整備を中心に―
34	ナカジマ シンペイ 中嶋 晋平	石田　佐恵子	近代日本におけるマス・メディア空間の構造的研究　―軍に関する言説分析を事例に―
35	マツイ ヒロシ 松井 広志	石田　佐恵子	監視社会における空間的特質の差異

	氏　名	指導教員	テーマ
36	マツダ 松田　いりあ	石田　佐恵子	現代都市の消費空間におけるメディア／身体の社会学的研究
37	ヤン インシル 梁　仁實	石田　佐恵子	植民地都市における在朝日本人の映画体験
38	ミヤザキ ゲンタ 宮崎　弦太	池上　知子	単一送信的対人関係と社会的拒絶への耐性　―対人ネットワーク密度との関連―
39	ムカイ ユリコ 向井　有理子	池上　知子	都市的特徴としての移動性が外国人受容にもたらす効果に関する社会心理学的研究
40	タバタ タクヤ 田端　拓哉	池上　知子	都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化とレジリエンスの関係
41	タナカ タツヤ 田中　達也	堀内　達夫	オーストリアにおける高等職業教育機関の成立過程について
42	ヒロセ ミチヨ 広瀬　美千代	湯浅　恭正	都市における福祉教育の実践とその課題に関する研究　―小学校，高校教員への聞き取り調査から―
43	クマガイ ミカ 熊谷　美香	水内　俊雄	大都市における居住地域構造の変容に関する地理学的研究
44	マツバラ ヒトミ 松原　仁美	水内　俊雄	フランスにおける社会的排除と総合就労支援対策　―2005年社会統合法以降の展開―
45	モトオカ タクヤ 本岡　拓哉	水内　俊雄	東アジア都市における「不法占拠」地区消滅後の持続的コミュニティに関する研究
46	キタガワ シンヤ 北川　眞也	山崎　孝史	アーバン・シティズンシップの可能性を開示する場所の政治の多様性 ―グローバル化時代のイタリアにおける「社会センター」と「移民収容センター」からの考察―
47	ヤスエ エリコ 安江　枝里子	山崎　孝史	現代日本における観光地イメージの形成と身体的実践としての観光　―愛知県足助町を事例として―
48	アダチ マサトシ 足立　匡敏	村田　正博	短歌革新運動の発生と展開について　―都市と地方との関わりを視野にいれて―
49	タカシゲ クミ 高重　久美	村田　正博	小栗十洲と化政期北越の文人たち
50	ネゴロ アサコ 根来　麻子	村田　正博	日本の古代社会における散文と文化
51	オウ シュウバイ 王　秀梅	丹羽　哲也	古代日本の言語生活をめぐって　―漢文訓読と日本語語義・語法の変遷について―
52	ヨツモト ナオ 四本　奈央	久堀　裕朗	江戸時代中期における上方歌舞伎と浄瑠璃の交流について
53	リュウ ケイ 劉　慶	久堀　裕朗	日本の古典演劇と中国古典との関わりについて
54	オウ ヒョウ 王　標	山口　久和	清初江西における文化的秩序の再建　―江西巡撫宋犖とその交友を中心に―
55	ヤマグチ ヒロコ 山口　博子	齋藤　茂	清代18世紀の中国における文人ネットワークと文化活動について
56	フジカワ カツヤ 藤川　勝也	瀬戸　賢一	日本語の副詞に関する比較文化論的研究
57	オクノ ミチコ 奥野　みち子	田中　孝信	トニ・モリスンの『ジャズ』と『ラヴ』の謎の語り手と語られる都市
58	サイトウ コウスケ 齊藤　公輔	神竹　道士	旧東ドイツの秘密警察シュタージの記憶　―ライプツィッヒに残る秘密警察施設跡博物館を中心に―
59	タハラ ノリカズ 田原　憲和	神竹　道士	ルクセンブルク首都方言の音韻的特徴とその広がりについて
60	ツジ マサコ 辻　昌子	津川　廣行	フランス世紀転換期文学における都市と幻想
61	チュウジョウ タケシ 中條　健志	福島　祥行	メディア言説における，フランスの「郊外」の問題化プロセスの解明
62	イシカワ ユウ 石川　優	三上　雅子	現代都市における女性のポピュラーカルチャー受容のメカニズムとオルタナティヴなメディアとしての同人誌に関する研究 ―〈やおい〉の表象分析を通じて―
63	シバタ エリ 芝田　江梨	三上　雅子	モダン都市大阪における「舞踊」の発展とその影響，またその過程で生れた身体文化の考察
64	ノダ 野田　はるか	小田中　章浩	ミーム・コルポレルの身体表現技法と他のパフォーミング・アーツとの比較研究
65	オカド カオリ 岡戸　香里	中川　眞	中部ジャワにおける伝統芸能の新たな存在意義　―コミュニティへの社会包摂的な応用を通して―
66	オカベ マサミ 岡部　政美	中川　眞	王宮舞踊が観光芸能へ応用されるときの振りの変化
67	サトウ リョウ 佐藤　量	中川　眞	戦前上海の共同租界における多民族交流と中国社会への影響　―学校空間を事例に―
68	トミオカ ミチ 富岡　三智	中川　眞	ジャワ舞踊ではなぜ儀礼性を求めるのか
69	ノブトウ ヒロユキ 信藤　博之	中川　眞	プーケットの教育機関を核としたローカルコミュニティの再構築と持続的発展